
E

高橋 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E

【Nコード】

N1344Y

【作者名】

高橋 薫

【あらすじ】

地球外生命体の細胞「E」。

それを利用しようとするフェニックスとそれを阻止しようとするS

C・A・R。

両者の戦いと、ある惨劇が起こった平行世界の物語。

以前所属していたP・M・F・で公開していたものと内容は同一です。

1・岸田 健児(前書き)

中学時代に書いた小説

1・岸田 健児

月明かりが窓から入り込んでくる。
薄暗いオフィスを照らしているのは、ただそれだけ。

静かなオフィス。

静かなのは無理もない。

床に転がる死体。

喉をかききられ、心臓を一突き。

辺りは血で汚れている。

彼らを殺した張本人、高橋 成実は黒いコートを羽織ったまま辺りの書類を物色している。

黒のコートは血を隠せる。そう、彼から教わった。

彼は俺の上司だ。

この仕事をする上で大切な事を教えてくれた男……。
感謝もしているが同時にやりきれない思いがある。

彼に会わなければ俺は……こうしていることはない……と。
もつとまともな仕事が出来たはずなのに……。

だが今更そんなことを言っても仕方がない。

俺が歩んできた道は、変わりはないから。

社長室から俺と同じく成実の部下の岩倉 義一が出てくる。

彼はこの仕事を誇りに思っている。迷いもなく仕事をしている。
それが、時に羨ましかった。

そう……こんな場面では……。

「高橋さん、この情報が正しければ・・・数ヶ月以内に・・・。」

手にした書類を成実へ渡して言う。

彼はいつも成実のことを”成実”ではなく”高橋さん”と呼ぶ。

彼はいつもそうだ。別に成実が成実で良いと言っても、だ。

「ああ・・・。だがサンプルはここにあったか？」

いいえ、と岩倉は首を振る。

成実は舌打ちすると俺と岩倉を後ろに着かせてドアから外に出ようとする。

が、ドアの向こうで激しく階段を上ってくる音がする。

マズイ。警官か？いや・・・この建物のガードだな。嗅ぎ付けたか。

成実の反応は素早かった。

オフィスの大きな窓を突き破って外に出た。

月明かりを反射させ、粉雪のように舞っていくガラスの破片。

俺たちも後に続くが正直言ってこういうのは怖い。

死に近いという緊張感が漂っている。

成実は着地すると同時に裏路地を素早く走り抜けた。

俺たちも後に続く。

”姿を見られてはいけない。見られたならば排除する。”それが彼のモットーだった。

だが無駄に殺しはしない。

殺していけば足跡を残すことになるからだ。

何処の誰が嗅ぎ付けてくるか分からない。

路地を、ブロックごとに網田のように駆け抜けて、そのまま走る。人通りの少ない、薄暗い道が多かったからこの辺りは動きやすい。

成実はその後民家の脇を抜けて堤防へと登っていった。民家とは言っても、人が入っていない空き家だと言ったことを彼は知っている。

事前調査は、忘れない男だから。

堤防に登ってやっと一息つく。

こうすれば殆ど場合は任務完了だ。

空を見上げれば満月が辺りを照らしている。

「よし、今日の所は任務完了だ。家に帰れ。」

そう短く言って成実は歩き出す。

岩倉は頭を下げてそれから成実とは別の方向へ歩き出す。

俺は成実の後を着いていく。

二人の帰宅方向は大体同じだからだ。

特に会話を交えることもなく、ただ二人で歩いているだけだった。

この時間帯で、しかも国道でも何でもない道だから車も全く居ない。静かな夜だった。

2・高橋 成実

その場の空気の変化をいち早く感じ取って、バックサイドホルスタ
ーから愛銃を抜くが遅かった敵が放った高速のブレットは抜いたば
かりのハンドガンを捉え、その衝撃で手から銃が飛んでいく。
川に落ちる、そう思って予備の一丁をショルダーホルスターから抜
く。

そして応戦しようとする岸田を制す。

「やめろ。ここは俺がやるから逃げろ。」

そう言うと同時に素早く敵に狙いを定めて撃つ。

明らかに分が悪かった。敵は橋の上を走る線路の脇から射撃してい
た。

月明かりに反射する銃のシルエット。

何の混ざり気もなく反射したところを見るとステンレスモデル。

そりにあのシルエットは1911だ。

だとすれば装弾数は多くて9発、だがマグバンパーが付いているよ
うにも見えなかったから恐らくチャンバーの分を足しても8発。そ
して1発撃ったから7発以下。

こちらも同じだ。チャンバーの分を撃ったから7発しかない。

敵は撃ってくるのを分かっている。

だから立ち止まるうとしない。

そして動きながら撃ってくる。

動いていると命中率は下がるがそれでも俺の周りに着弾する。

こちらは不利だがその場で動かずに正確な射撃を撃っている。

相手はもう弾切れの筈だ。

だがこちらにも残弾はあと2発・・・。

次で！

バレルから射出されたホロー・ポイントは敵の足に突き刺さり、そのまま停止する。

敵は苦痛に顔を歪めて橋の上へと落下する。

銃がその手から銃を落とすが直ぐに銃を拾って立ち上がる。

なっ・・・。

動揺している俺をよそに奴は橋の下へ逃げようとする。

橋の下は・・・川だ！

チクシヨウ！！

俺が奴に近付く前に橋の下へ落ちる。

慌てて近寄るが奴の姿はない。

…だが水音もしなかった。

身を乗り出してよく見てみる。

何か…。

だが俺の目の前に銃口が突きつけられる。

そしてマズルファイアと共にブレットが肩を貫通していく。
もう一発。

バランスを崩して橋から転落する。
目の前に、真っ黒な川が迫っている。

奴は橋の裏に捕まっていたのだ。
しかも見間違いでなければ俺を撃った後にスライドストップがかかった。

ということは装弾数9+1…？

そうか！！奴の1911は9mm仕様なのだ。

9mm仕様ならば事実上装弾数は2発増加する。

ブレットが身体を貫通していったのもそのせいだ。

それが分かったのと同時に派手な水しぶきを上げて川に落ちる。

奴の顔が見えた。

ニヤリと笑うつり目の男。

その男の足から滴る、血。

奴の顔を脳裏に刻んで、俺は激しい水の勢いに負けて意識が遠のいた。

俺が誤算だったのは…俺が気付かなくてはならなかったのは…奴がEを体内に保持していたということだけだった。

3・高橋 成実

気付くと、そこは河原だった。

下半身は未だに水に浸かっているが上半身は何とか陸の上だ。

ゆっくりと身体を起こそうとして襲いかかる激痛。

あちこち打撲や切り傷だらけ。

心の中で毒づいて、身体に鞭打って河原へと這い上がる。

そして力尽きて倒れる。

辺りは夜の闇が晴れ始めて薄暗い、赤に染まっていた。

瞳を閉じて意識を集中する。

ここは何処だ？どれだけ時間が経過した？

色々なことを考える。

銃は無い。

ジェット・ブラックは敵の攻撃を受けて川へ落ち、アサルト・レイ
ウンは落ちた拍子に落としたようだ。

こんなときに……。

そもそもアイツは誰だ？

何故我々を襲った？

だが答えは見つからない。

そこへ小石の上を歩いてくる音。

顔を上げるとどこかで見た顔が表れた。

どこかで見た…。

”彼女”は俺の身体を持ち上げると肩を貸して言った。

「ごめんなさい。久しぶりだけど…話している時間がないの。…」
めんね。」

声を聞いて思い出した。

そして同時に涙が溢れてくる。

そんな…まさか…。

「死んだはずじゃ…。」

目の前にいたのは忘れもしない、俺が原因で死んだ杏子その人だったから…。

「ううん。…とにかく、大丈夫だから謝るのは止めてね？あなたのせいじゃない。」

そう言うと俺を堤防を超えた先の住宅地の方へと連れて行った。

そしていくら歩いたろうか…朝日が見えてきた頃、見覚えのある風景…。

あ…うう…。

「暫く休んで。今は傷が癒えるのを待たないと。とにかく大変なの。」

…彼が復讐に来たの…。」

…復讐？奴は俺が知っている男なのか？

「とにかく今は休んで。・・・大丈夫だから・・・。」

そう言つて彼女はある家の前にやってくると俺を降ろして腰のポーチから包帯を取り出して俺の肩に巻く。

オイオイ・・・それだけかよ。

そう思つたが仕方ない。

弾も貫通しているし、日本にまともな銃傷の処置が出来る病院があるとも思えない。

そして彼女は家のチャイムを数回鳴らすと短く「今は身を隠してて」と言つてどこかへと消えていった。

少しの間を置いて、寝間着に身を包んで少し眠そうな・・・懐かしいアイツが出てきた。

アイツは俺の姿を見るとはっと息を飲んだ。

「久しぶり…、夏蓮。」

「えっ、えっと・・・とにかく入って！」

オロオロしながら彼女は俺を家の中へと放り込む。

無理もない。随分会っていないし、再会したと思えばずぶ濡れで凄いい格好だ。

まあ血は見えないだろうが……。

昔と変わらない、そこ。

ここだけが唯一落ち着ける、俺の居場所。

「一体何があつたの!? ねえ!？」

ドアを閉めるなり激しい質問攻撃。

変わらないね。やっぱり。

そう思つて少し笑つてしまう。

「笑い事じゃないっ!! ……しかもずぶ濡れで……。風邪ひく!」

そう言つて奥の部屋へ消えるとタオルを持って戻ってきた。

「もう……。一体どうしたのよ……」

そう溜め息をこぼしてうんざりしたように言つた。

一瞬、話そうかと思つた。

だが話せば彼女に無駄な心配をさせるだけ。そして彼女自身をも危険にさらしてしまうかもしれない。

「ごめん……。今はまだ……。話せない……。でも、いつかきつと話すから。」

彼女はじつと俺の目を見る。

「なぜ? 教えてよ?」と目が訴えている。

だが彼女もバカではない。何かあると察して頷いてくれた。

「ありがとう……。」

俺がそう呟くと彼女は俺を寝室へと引きずっていった。

4・岩倉 義一

電話が鳴ったので見てみれば・・・岸田か・・・。

「岩倉だ。どうした？」

「岩倉。成実から連絡はあったか？」

成実・・・夕べから連絡はないが・・・。
なにかあったのだろうか？

「いや。一体どうしたんだ？」

「成実と連絡が付かないんだ。・・・何か心当たりは？」

「お前が知らないのに俺が知るわけ無いだろう」と言えばアイツも溜め息をつく。

「まさか・・・昨日帰りに成実が誰かに襲われて戦ってたんだが・・・やられた・・・訳じゃ・・・」

その言葉に目を見開く。

バカな・・・レイヴンを務めていて、あの腕の成実がやられただと・・・？

「とにかく、俺はこれから成実の手がかりを探しに行く。お前はど
うする？」

迷わずに言う。

「勿論行くさ。場所は？」

この真つ昼間だというのに……この道は本当に人通りが少ない。
車が時たま走ってくるぐらいだ。

痕跡を探すが見つからない。

血痕も、薬莢も。

まるで何事もなかったかのように……。

「本当にここか？」

念のために岸田に尋ねる。

もちろんだ、と頷く。

ふと橋の柵に向かって歩き出す。

そして、川を見る。

流れが速い。

やはり数日前の大雨の影響だろう。

「川に落ちたのでは？」

「それは俺も考えたが違うな。痕跡がまるでない。相手も銃を使っていたんだぞ？わざわざ格闘するか。」

それもそうだ。

だが全くあり得ないとも言いきれない。

「じゃあ何処へ行ったんだ？」

とは聞いたもののまともな答えが返ってくるとは始めから思ってい

な
か
っ
た。

5・高橋 成実

夕日が沈み始めた頃、チャイムが鳴る。

夏蓮は出ている。

どうしようか・・・と、迷っていると「私よ。」という声。

ほっとしてドアを開けると杏子が手に何かを持っていた。

完全にバラバラになった銃。

分かってる。

アサルト・レイヴンとジェットブラックだ。

「ダメだったわ。あなたの身代わりね。あなたが流された後、敵が派手に爆発させてくれたから。」

「何だつて!? 爆発!?!」

「ええ。大したこと無いわ。あなたを葬り去ろうとしたみただけど・・・運が良かったわね。」

言葉が出ない。まさかこんな事になるとは・・・。

「とにかく、今は急いで新型のハンドガンを制作しているところだからそれまで・・・。」

「いや。止めてくれ。」

「なんですって!?!」と叫ぶ彼女に俺は告げる。

「正直・・・もう駄目なんだ。実は最近考えていたんだ。今の俺はもう時代遅れだと。だから・・・他の奴に任せる。」

彼女は言葉を失っていた。しかたないが・・・。

「いいわ。あなたの記録は消しておく。死んだことにしてね。・・・」
静かに暮らしなさいね。」
「ありがとう・・・。」

彼女はそして家を出て行った。

6・岸田 健児

成実が消息を絶ってから既に一年以上が経過した。
未だに消息が掴めない。
生きているのか、死んでいるのか…。
だが今は目の前にある問題に対処しなければならなかった。

「畜生…。」

岩倉が書類を見ながら呟いた。

成実がない状況でこの情報はマズイ。

「…どうする…?」

俺が尋ねても岩倉は一人毒づいている。

俺は溜め息をついてゆっくりと奥の扉へと近付いた。

ドアが自動的に開く。

本来ならばカードキーが必要だが職員を殺したので問題なく入手できた。

その部屋は赤いランプで照らされ、その円柱状の水槽に入った”それ”がよく分かった。

初めて俺が見る、真実。

Eを入植されたニンゲン。

その容姿は奥へ進むに連れて酷く醜くなっていく。

「こんなことして何になる…?何の為…?」

つい呟いた。

それは機械的でもあり、完全な生物と言えるのかも知れない。だがそれが何になる？何の意味がある？俺には理解できない。

その時不気味な音がした。

獣が喉を鳴らすような音。

オフィスの岩倉も警戒してこの部屋に入ってくる。

水槽の中でチューブに繋がれ培養液に浸っていたそれがゆっくりと動いた。

そして赤いランプは緑のランプへと変わり点滅する。

「なんだ!？」

岩倉に尋ねる。

岩倉は比較的冷静だ。

「マズイ。定期的に何か処置をしないと活動を再開するのかも。」

その言葉通り水槽の一つが”それ”によって叩かれ、ひびが入る。培養液が床を流れていく。

「来い!!」

そう言っただけで岩倉が俺を部屋の外へ向けて引っ張っていく。

後ろでガラスが割れ、破片が散乱する音。

そして何か重い物が床に落ちる音。

「逃げ!!」

岩倉がカードキーの機械の前で叫ぶ。

俺は一度振り向いた。

ニンゲンより先に部屋の片隅のある水槽が目にはいる。

割れた、と言うよりは切り取られたような…そんな穴が空いた水槽。

よく見る前に岩倉が俺を引っ張り、ドアを閉める。

分厚いドアが勢いよくスライドして閉まる。

部屋の片隅のモニターが目にはいる。

化け物が次々に”孵化”しなにか意志を持っているかのように何か不気味な音を発する。

” 奴らの目的は母体への帰還 ”

誰かから聞いたその言葉が脳裏によぎる。

だとすれば…。

モニターは怪物達が通風口を抜けていこうとする様子を映していた。

「 岩倉！ 」

そう叫んでオフィスから出る。

外へ出たときには奴らが通風口から出ようとしていた。

一体が外に出る。

「これ以上逃がさん。」

そう言って岩倉はハンドガンのマガジン一本分を通風口の中に撃ち

込む。

そして脇にあったカバーを…恐らくこうなることを予想して存在していただろうが…それを閉めてツールの中から溶接用の工具をとりだして溶接を始める。

「お前は奴を追え!!」

そう言われて思い出した。

逃げ出した奴が居る。

もはやニンゲンとは思えないあれが。

奴の姿は何とかまだ見える。

奴を追って走った。

人通りが多いがビルの壁を高速で移動するそれには誰も気付く様子はない。

俺はとにかく走った。

息が上がってくる。

住宅地にもうすぐさしかかろうと言ったときに岩倉も後ろから走ってきた。

7・高橋 成実

夏蓮と共に歩いて帰路についている最中だった。

やっと静かに暮らせると思い始めた矢先の出来事だった。

異様な音と夏蓮の悲鳴。

振り返ると…確かにあれが居た。

ニンゲン。Eを取り込んだ生命体…。

そして後ろから岸田と岩倉が走ってくる。

岩倉が大声で「まで！！」と叫ぶのと奴が振り返るのには殆ど差がなかった。

奴は武器のない俺たちより武器のある奴らの方が目障りだと思ったのだらう、素早く岸田に飛びかかる。

…確かに岸田より岩倉の方が腕っ節は弱そうが…。

岸田は銃を落としたがキャットファイトを繰り広げる。

大口を開ける敵に数発殴って蹴り上げる。

奴がふき飛ばされる。

…意外と腕っ節は強かったのか。

その間に夏蓮は俺を引っ張って逃げていく。

だが俺の視線は奴らに釘付けた。

そして岸田が銃を拾って撃とうとするが奴が素早く岩倉の顔面を殴り飛ばす。

凄まじい衝撃に岩倉の身体もろとも吹き飛ばされる。

銃が宙を舞う。

それを見逃さなかった。

軽く夏蓮の手を振り払い、夏蓮が驚いて振り向く頃には走り出してその飛んできた銃が地面に当たってバウンドしたのを見計らい素早くローリングして銃を握る。

奴は岩倉の喉笛をかききろうとしていた。

あまりにも素早い動きに岸田の動作が遅れている。

ローリングしたまま流れるようにリーニングポジションをとる。

そして素早くコックされた銃のセーフティーを解除してダブルタップで撃つ。

発射されたホロー・ポイントの45口径弾は敵の本来脳が収まっている場所へと突き刺さる。

その衝撃に耐えられず静止した奴に岸田がありったけの弾でとどめを刺す。

奴は岩倉に倒れこんで岩倉が慌てて脇にどける。

俺はホッと溜め息をついて立ち上がると倒れている岩倉を助け起こした。

「銃を返すよ。」

そういつて彼の手に銃を返すと俺は二人の顔をまともに見ないまま夏蓮の元へと戻った。

「成実…。」

目に涙を一杯に浮かべて泣きついてくる。

怖かったのが手に取るように分かる。

後ろに二人が近付いてくる。

「高橋さん…あなた腕は落ちていませんね…。」

尊敬と軽蔑のこもった岩倉の言葉。

当たり前だ一年以上もろくに連絡しなかった。

「成実…今までどうしていたんだ!？」

やはりきたか…そう思って今までの出来事を簡潔に話す。

あの戦いの後のこと、新しく生活を始めたことも…全て。

「高橋さん…S・C・A・Rに戻って下さい。皆あなたを必要としています。おまけに数日後には市内の中学校で入植体のバイオエフェクト予定日です!!なんとかしないと…。」

え、と言う表情を岸田も浮かべる。

「あれ、俺お前に言わなかったっけ…」

「言っていない!！」

咳払いをして話題を戻させる。

「だが俺は戻れない…もう俺は…」

拳を固めて怒りをこらえる。

言いようのない怒りがこみ上げていた。

やっと夏蓮を寝かしつけた。

涙の跡がハッキリと分かる。
彼女に泣かれるのが、辛かった。
だがこのさきそれが心の傷になると思つと……。
やりきれなかった。

だが悩んでいる暇もなくチャイムが鳴る。
俺の予想はきつと当たる。

ドアを開けると杏子が居る。
手にはガンケースが2つある。

” A & a m p ; T U S A F I R E A R M S I n c ” の赤い
文字が見える。

「銃を届けたわ。後はあなた次第。」

そう言つてガンケースを玄関において彼女は去つていった。

ガンケースを持って二階の俺が割り当てられた部屋へと向かう。

デスクの上にガンケースを置いて、傍らのスタンドを付ける。

そしてガンケースを開くと確かに、そこには自分好みにカスタムされた1911の姿があつた。
手に取つてみる。

” U . S . M i l l i o n / S . C . A . R . T E A M ” という
文字がスライドの右側に、反対側には” R A I V E N ” の文字と”
U . S . S L E . 4 5 P i s t o l ” の文字が刻まれている。
またもう一丁の方にはベルトクリップが付いておりアサルト・レイ
ヴン以上に予備の一丁としては最適なものだった。

だが俺は銃をケースに戻しケースを開いたままスタンドを消してベツドの上に横になる。
そして考え込んでしまう。

俺は…どうすればいい…？

気が付くと既に朝。

窓から陽光が入り、部屋の中を照らしている。

ゆっくりと身体を起こす。

そして視界の端に目をやる。

2つのガンケース。

そしてその中に収まる銃。

どうすれば…。

部屋のドアがゆっくり開いて夏蓮が入ってくる。
既に身だしなみは整えられている。

「…戻るの？」

不安げに聞かれる。

俺だって不安だと、彼女を抱き寄せる。

「俺はどうすればいい…？」

迷い。

俺は迷っている。

もう彼女に辛い思いをさせたくない。だがその一方で自分にはしなくてはならないことがあることも分かっている。どうすればいいのか、分からなかった。

「大丈夫…。私は待ってるから…。だから、帰ってこれるときは帰ってきて…ね？」

その後はしつかりと抱き合ってたただ涙を流すだけだった。

1時間ほど経過した頃、夏蓮は一階へと下りていった。

残された俺は脇のデスク・・・その上に乗った2丁のハンドガンに目を向ける。

・・・俺は・・・戻る。夏蓮の為にも。そして、俺自身の為にも。

ゆっくりと立ち上がり、デスクへ歩み寄る。

ためらいもなくそのハンドガンを手を取った。

夏蓮がその建物の前に車を止める。

そして少しの間の沈黙。

重い口を開いたのは彼女の方だった。

「私、待ってるから。連絡だけでもいい。ただ生きてて・・・愛し

てくれていると分かるなら……。」

俺は無言で彼女を抱きしめ、最後になるかも知れないキスをする。
短い、時間。

でもそれだけで分かり切ってた。

一人じゃないんだ、と。

そしてコートの内ポケットからそれを取り出す。

それは首から下げられる、十字架。

俺と夏蓮が二人で交換した物。

夏蓮もそれを取り出す。

「いつも持つてるから、ずっと。一緒だから……。」

別れるのが惜しい。

もっと一緒にいたかった。

でも……今の俺には許されないこと。

二人でしっかりと抱き合って、最後の時を惜しむ。

そして誘惑を断ち切り、脇に置いてあるスニーカーを手取る。

車を降りて振り返る。

夏蓮は微笑んで、ストリートを走って行った。

俺はそのまま建物の中へ進んでいく。

無機質な廊下。

懐かしい……。

昔は俺もここに配属されていた。

だがRAIVENに配属されてからはここに来ることもなくなった。

だけど今はこの場所を歩いている。
何とも言えない気分だ。

昔と変わらない。

俺はホールを抜けて4階のある部屋へと向かった。
そしてその部屋へ着く直前、ある人物が部屋から出てきた。

「あ……浅倉!？」

驚いてつい声に出してしまう。
呼ばれた人物は振り向いて同じく息を飲む。

「た……高橋さん!？」

彼女は俺の昔の部下。

大学を卒業してW・U・S・S・Mに戻ったという話は聞いていたが未だにここにいたとは……。

「お久しぶりです。復帰されるのですね。おめでとございます。」

「あ、ありがとう……。」

浅倉は昔のように明るく声をかけたが俺はまだまだ乗り気ではない。

「じゃあ俺は用があるからこれで……。」

「はい。」

淡々とした会話だが妙に懐かしくて、嬉しい気もした。
だが本当に嬉しいことではない。

俺は、あくまで夏蓮の幸せを願っているからこそ戻るんだ。

浅倉が廊下の向こうへ消えた後俺はその部屋の扉を2回ノックする。
「入れ。」という声と共に「失礼します。」と言って部屋に入る。

中にはこの支部の所長と…ブロンドの白人…。

軽く礼をして言う。

「お久しぶりです、杉田さん、ジェイソン。」

二人とも軽く笑ってそれに答えた。

「まあ、座りたまえ。」

「いえ、立ってます。」

こんなやりとりも、普通り。

「さて…君には辛い決断をさせたな。すまなかった…。だが戻ってくれて…ありがとう。」

ジェイソンにこんな事を言われるとは正直意外だった。

そしてジェイソンは小さな箱を俺に差し出す。
あれだ。

それを受け取って開けると思った通りの物が出てくる。

青みがかった黒のカラスを模った小さな勲章。

裏に赤く”RAIVEN”の文字が入っている。

「以前と同じ階級だ。…さっそく仕事にかかってくれるか、成実？」
俺はコートの下に着たS・C・A・Rの制服にそれを付けると二人を真っ直ぐと見てから、「わかりました。」と短く答えてその部屋を後にした。

8・岩倉 義一 / 岸田 健児

シティ中心部からはかなり離れた郊外の森の中に佇む廃屋で岸田と二人で話していた。

「成実は戻るんだろうか……。」

岸田が呟く。

わからない、と俺は首を振る。

ただでさえ今の彼は不安定なのだ。
分からない。

だがあの強さは今でも健在だった。

二人が手こずったあのニンゲンをたった一人であそこまで追いつめたのだから。

「だが彼が戻るとして…バイオエフェクトはまず止められないと思っ
つていい。だから…今の内に覚悟しないと…。」

そう言っつて岸田に背を向け窓の外に目をやる。

ゆっくりと雨が降り始めた。

静かな廃屋の中で電子音が鳴り響く。

俺の電話だ。

「岩倉です。」

相手は学校職員の中のS・C・A・R・隊員だ。

ということは……。

「バイオエフェクト発生しました。至急バックアップに！」

岸田に頷いてみせ、素早く電話を切ると廃屋の前に止めてあったSUVに乗り込んだ。

学校の駐車場に車を止めて素早く中に入ろうとする。

正面玄関は閉まっていた。

当然だ。緊急事態の際には入植体が逃げないように通風口から排水溝まで全てが遮断される。

・・・となれば・・・。一階のある窓ガラスをたたき割って進入する。

そこは用務員室だった。

今は誰も居ない。

進入して岸田に直ぐ言う。

「急ごう。SAIGAが来る前に脱出するんだ。」

素早く用務員室を出て悲鳴の響く廊下を駆ける。

廊下の影からニンゲンが姿を現した。

素早く発砲する。

素早くターゲットをダウンさせて一時的に活動を停止させている間に素早く注射器を奴の皮膚に突き刺し、血液サンプルを採る。

「よし、行くぞ。」

そう言っただけで岸田は二階に、俺はそのまま体育館へと走っていった。

体育館では逃げ遅れた生徒の一人がニンゲンの餌食となっていた。触手を突き刺され細胞を入植される。

この距離なら楽に狙えた。

ニンゲンをダウンさせその生徒も撃つ。

奴らに変化してからより変化する前の方が楽に殺せるからだ。

敵がないのを確認して奥へ進んでいく。

教官室の中に隠れている生徒が居る。

だが奴のことは無視した。

我々の仕事ではない。

完全にクリアしたことが分かるとサンプルを採って体育館を後にした。

腕時計に目をやる。

あまり時間がない。

小走り程度で移動していると脇の金属製のドアが吹き飛ばされ、それに当たって頭から流血する。

激しい痛みをこらえて立ち上がるとそこには一人の教師が立っていた。

既に人ではないと分かっているが激しい痛みから上手く撃てないのは目に見えていた。

想像以上にこの場所はマズイ状況だった。
撃っても撃ってもきりがない。
想像以上の速度で入植が進んでいる。

銃のマガジンを交換してスライドストップを下ろす。
スライドが前進して初弾が装填される。

どこかに敵はいないかと見回すがその最中に脇の水飲み場・・・排水溝から汚水が逆流する。

何事かと身構えれば激しい衝撃が水飲み場の辺りを襲う。
銃を向ければ異様な高い音と共に排水溝の蓋が吹き飛ぶ。
激しく湾曲したそれは天井へ突き刺さった。

啞然として見ていれば排水溝の中からゆっくりと・・・得体の知れない化け物が出てきた。

蛇に足の役割を持ったヒレを持った生物・・・とにかくそいつは俺の方を向いて高い音で威嚇する。

ためらいもなく銃を上げて撃つ。

一発では心配なので2発目を撃ち込んでその場を後にした。

そのニンゲンは俺の目の前で小刻みに身体を震わせていた。
どっと汗が噴き出し息も荒い。

そして悲鳴をあげると首の辺りを掻きむしった。
それも血が流れ出すぐらいに。

そして一気にその場所から血が噴き出し、辺りを血で染めた。

その傷口から蛇のような生物がぬるりと姿を現した。

教師の身体が倒れると同時にその生物は奴の身体からはい出してきた。

そして俺に飛びかかろうとする。

ただでさえ小さいのに今の俺では……。

とにかく撃つ。

敵の周囲には当たることができず、的を捉えることが出来ない。マガジンを交換しようとするが、上手く身体を動かせない。

敵が身体を反らせる。

飛びかかってくる前兆だと俺には分かっていた。

逃げようとするが足が扉に挟まって動かせない。

敵が俺の首に向かって飛びかかってきた。

俺は渾身の力で扉を持ち上げると、奴に向かって叩き下ろした。

そして足が抜けたので素早く激痛に悩まされながらも立ち上がる。どす黒い液体が扉の下から流れ出てくる。

その場を後にしようとして振り返ると大勢のニンゲンが集まっていた。彼らはゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

マガジンを交換して撃つ。

だがやはり狙いが上手く定まらない。

仕方なく胴体を狙う。

これでは効率良く敵など倒せるはずがない。

マズイ……そう思ったのも束の間、銃声と共に8体のニンゲンが倒れ、残りのニンゲンも振り向いた瞬間誰かが走ってきてドロップ

キックをかまし、その場に突っ伏した。

振り向いた顔は・・・成実!?

驚いて立ちすくんでいると彼は叫ぶ。

「何してる!?! 来い!!!」

その声に我に返って走り出す。

激痛に顔を歪めながらも走っていく。

後方で蹴られたニンゲン共がうめき声を上げながら立ち上がるうと
していた。

成実が戻ってきた・・・というのは頼もしいのだがどうも不安だ。

岩倉も怪我をしたようだし。まあ命に別状はないようだが。

取り合えず頭に包帯を巻いていた。

「...それで俺たちはどうするんだ?」

今俺たちが話し合っているのは同窓会を兼ねた旅行だった。

普通にやればいいと思うのだが...何故か旅行だ。

まあ学校の連中はろくな奴が居なかつたのでこれも有りなのかも知
れない。

「取り合えず行かなくては。バイオエフェクトが起こる可能性がある
という情報があったんだろ?」

それにああ、と岩倉が頷く。

「例の書類には俺たちの学校で行われた実験のデータもありました。バイオエフェクトは近いと思われるので監視しておいた方が良いでしょう。」

成実が頷く。

皆の意志が固まったところで成実が咳き込んだ。

成実の手の動きが止まる。

手から血が溢れ出す。

その症状は皆にとって絶望的だった。

何故！？いつ何処でどうやってこうなってしまったのか分からずただ呆然としている。

俺は無意識のうちにゆっくりと後ずさりをしてしまった。

だが岩倉は違った。

逆に成実に近付き、「大丈夫ですか！？」と様子を訊いた。

「大丈夫だとは言えないね。」

そう言っただけ苦笑いのまま再び咳き込んだ。

苦しむ彼の様子を見てみると後ろから誰かが歩いてきて俺の脇を通り過ぎる。

女だ。

ショートカットの女。

ホルスターを吊っているところを見るとこいつも…。

彼女は成実の側に行き、何か囁くと彼を奥へと連れて行った。

その時俺は見逃さなかった。

彼女も制服に成実と同じカラスの紋章を付けていることに。

9・高橋 成実／神谷 夏蓮

「あなたは死なない。でも…苦しむことになるわ…。」

杏子が咳き込む俺に静かに告げる。

苦しむのは当たり前だ。既に体中が焼けるように痛む。

今の俺には満足に話すこともままならなかった。

「とにかく暫くは満足に動けないときもあるか知れない。…でも大丈夫だから。激しく痛んだときは一人になりなさい。どうなるか…分からないから。」

そう言って彼女はそっと窓から出て行った。

「成実…帰ってこられるかな…。」

一人だけの家でポツリと呟いた。

やっぱり寂しい。

一人なんて…久しぶりだから。

何を言っても仕方ないか。彼は仕事。

私だけを見ていて、なんて言えるわけ無いから。

観念してバスルームへ向かおうかと思ったときインターホンが鳴る。

まさか成実じゃ!?

期待と不安の両方が混ざり合いながら玄関へ向かう。
扉を開けると残念ながら予想は外れ。
知らない女の人立っていた。

彼女は無言で私にケースを差し出す。
アルミ製のケースだ。

「もし、彼が助けを必要としたときに助けられるのはあなただけよ。
しっかりと支え合いなさい。」

そう言つて彼女は去つていった。
残された私はケースを持つて居間へと向かう。
そこそこ重量のあるケースだ。

テーブルについてそのケースを開ける。
そこには私が予想もしなかった物が入っていた。

一丁のハンドガン。
海外へ旅行へ行つたとき何度か撃つた…えつと…45口径の…わか
んないや。

とにかくその銃がそこにあつた。
何本か弾倉もある。
勿論実弾が装填されていた。

こんな物を渡しに来た彼女は一体…？
そしてその真意は…？

疑念が渦巻く中、私はそれをタンスの中にしまい込んだ。

どうか、これを使わなくても済むようにと祈りながら…。

やっと成実が帰宅した。

私は何も悟られないように、出来るだけ普通に会話しようとした。成実は何か感ずいたようだったが、あえて彼は何も言わなかった。

「ところで今度の旅行はどうするの？」

多分”行かない”だと分かっているながら訊いた。

私は友達にも会いたいから行く予定だった。

・・・ちよつと寂しいけど・・・ね。

「行くつもりだよ。まあ・・・心配事は多いが・・・。」

「ええっ!?!」

思わず声を上げてしまった私に成実が顔を上げる。

「い・・・いや・・・まさか行くとは思ってもいなかったから・・・。」

なぜ成実はこのとき「いく」なんて言ったのか・・・。

その理由に気付いていればあんな事には・・・ならなかったのかも知れない・・・。

昔懐かしい学校の前で俺は夏蓮が旧友達との交流をしている間に、ジェイソンに電話をかけた。

「ジェイソン、私です。セカンド・D・Dayスタートします。」

そう言つて素早く電話を切る。

程なくして岸田と岩倉が到着する。

「準備は？」

二人とも頷く。

皆コートの裏にハンドガンを忍ばせていた。緊急時の為、だ。

荷物の中にも弾薬やマガジンが入っていた。

…当然重いが。

時間が経つにつれて次々と懐かしい顔ぶれが揃う。

あの頃はバカ三昧だった彼らもこの数年で成長したようだ。

…一部を除いて。

煙草と香水の匂いと共にあの頃の不良はヤクザへと発達していた…。

全く、どうして彼らはこんなに不器用なのかと溜め息をつく。

だがそのおかげで良い”宿”になったのだ。

彼らには感謝しないと…な。

素早くコートのポケットからメディアツールを取り出して状況を記録する。

「7:48 A.M.。セカンド・D-Day、Day 1。ターゲット確認。」

8時丁度。

元学級委員長が指示を出し、バスに乗り込む。
バスの席は既に決まっていた。

…何故か俺は夏蓮の隣。

…あの元学級委員長の仕業か…。

周囲の冷やかしを受けながら彼らに冷たい視線を向けると皆黙り込んだ。

そしてバスが出発すると俺は皆のバカ騒ぎには飲まれず、ノートパソコンを広げる。

…別に仕事をするわけでもなくあちらこちらのメーカーのHPを閲覧する程度だ。

途中でメールが来る。

岸田からだ。

『いつものチャットへ来い』

はいはい、と思いながらチャットへ行く。

岩倉も来ていた。

そこでは銃器の話題で盛り上がった。

どうやら岸田はM4/M16系の銃の購入を考えているらしく、岩倉に「ロックリバー・アームズの買え」と言われていた。

…いつまでこんな会話をする余裕があるのか…。

そう思いながら、窓の外の景色に目をやった。

目的の街、まあ札幌なのだが、に着くと早速自由行動になった。

どうやらこの旅行、グループで遊びに行つて集合時間までに戻つてくればいい、という単純な物らしかった。

夏蓮は友人達と回ることにしたようなので、俺は部下達と共に街へと駆り出した。

広い街の中を歩いていくのはなかなか気分が良かった。たまにはこういうのもいい、改めて感じたことだった。

最近では吐血などの症状に悩まされ、なかなか気分を晴らせなかったからだ。

だから嫌なことは先に片づけて、ゆっくりと楽しもうと思った。そこでS・A・F・Eに車を一台手配し、仕事にかかることにした。

車は手配してから10分もたたずにやってきた。

乗ってきたまだまだ若手の青年に敬礼して、素早く乗り込んだ。

そしてメインストリートを抜けて寂れた山の中へ入る。
途中まで車を使ったが道が険しくなったので徒歩へと切り替えた。
この先に目的地がある。

木々が倒れ、道は崩れかかり、あちらこちらに死の気配がする。

どれだけ進んだらうか？

暫くすると目の前に巨大な廃墟が姿を現した。

バックサイドホルスターからハンドガンを抜いて廃墟へと足を踏み
入れていく。

中は荒れ放題だった。

壁の塗装は剥がれ、窓ガラスが割れて床に散乱する。

書類などはあちこちに散らばっている。

天井が抜け落ちているところさえある。

俺たちは無言で奥へ奥へと進んでいった。

と、奥に突然周りとの景色の中にとけ込めていないドアがあった。

電子ロック式の扉。

俺はそれに素早く番号を打ち込む。

ピー、という電子音が響き渡る。ドアが開くのと同時に後方と左右
から入植体が姿を現す。

岸田や岩倉より一足先に臨戦態勢に入り、2発頭に撃ち込む。

敵が怯んだスキに顎を蹴り上げる。

敵が仰向けにひっくり返った瞬間に胸にもう1発撃ち込んだ。

振り向くと岸田と岩倉も応戦していた。

二人ともなかなか腕を上げている。
こういう奴らを見ているのは面白かった。

岸田は速射で敵を怯ませ、徹底的にダメージを与えていく。
対する岩倉は一発一発を正確にヘッドショットに持ち込む。確実に
ダメージを与えていくタイプだった。

敵が動かなくなるとそのまま先へ進んでいく。
この先はますます荒れ放題だった。
普通ならこんな所にわざわざ来たいなど思わない。

だが今はとにかく仕事をしなくては。
入植体がうるついている以上長居は禁物だ。

建物の最深部：重い金属の扉をノックする。

暫く間を置いてからゆっくりと扉が開かれる。
そして中から一人の女性が出てくる。

まず最初に反応したのは岩倉だった。
彼女に向かって走っていき、腕を絡ませて盛大に抱きつく。

溜め息をついて二人の様子を見守る。
が、こんな事をしている場合ではない。

「その二人：悪いがいちゃつくのは別の機会にしてくれ。私には
する必要のあることがあるんでね。」

そう言うと二人はこちらを向いて気まずそうに苦笑いするとやっと
身体を離れた。

「うう…ごめんなさい。つい…。」

そう冷や汗をかいているのは岩倉の愛し人…妃河だ。

彼女はS・C・A・R・に所属しているがある男の部下として活動している。岩倉と所属は違う。

二人ともそれが寂しくもあり、必要なことだと感じている。だからどうこう言うつもりはない。

俺とて夏蓮とのこともある。

「では…どうぞ。」

そう言っただけで彼女は俺達をその扉の向こうへと案内する。

重い扉が閉じられると比較的片づいた廊下をゆっくりと歩いていく。

廊下の奥のある部屋の前で立ち止まり、ドアをノックする。

そして部屋の中へと俺一人足を踏み入れる。

その部屋はベッドとスタンドがあるだけのこじんまりとした部屋だ。ベッドの上で一人の男が横になっている。

「高橋…？」

そいつは顔を上げると俺を凝視した。

こちらも苦笑いでそれに答える。

「残念だが再会を喜んでいる暇はないぞ、藤川。これだ。」

そう言って一つの箱を差し出す。
彼はその中身が分かっていたようだ。

「ま・・・まて！今は無理だ！！こんな状態だし・・・。」

そう言って包帯だらけの腕や頭を指さす。

俺は彼の言葉が言い訳だとすっかり分かっている。

「ご冗談を。お前も既に入植された身だろ。もう治ってるぞ。」

「だが…今の俺に…。」

まだ迷う彼。

俺は彼に微笑みかける。

「俺だって入植されたさ。」

驚愕の表情を浮かべる彼に俺は続ける。

「昔のお前はもっと、自信があつたはずだ。少なくとも、今の俺もそうだ。彼女の為に、俺は戦うと決意した。もう二度と、後戻りは出来ないけどそれでいいんだ。すべてが終わったら、俺は消えるさ。」

しばしの沈黙。

俺は自信に満ちあふれていた。

戦う。それが俺自身の運命ならば。

俺はスタンドが置かれたサイドテーブルの上にその箱を置くと、部屋を出ようとする。

「戻るか戻らないかはお前次第だ。…お前次第だよ。」

そう言っつて俺は部屋を出ると部下を引き連れて部屋を出て行った。

11・神谷 夏蓮 / フランシス・アンダーソン

「夏蓮、どうかした？」

友達の声にはつと、我に返る。

「大丈夫？ 疲れちゃったんならちよつと休もうか？」

ううん、大丈夫と答えると再び友人達との会話。

私が考えていたのは……。

私はどうすれば良いんだろう……。

ふと上空に何かが飛んでいるのが見えた。

へり……？

「まだ何とも言えないわ。一旦基地に戻りましょう。」

へりに乗って市内を監視していた俺にジェシカが言う。

ジェシカの提案に俺は顔を歪める。
クソ。

この一大事に。

「フランシス？」

ジェシカが不安そうに訊いてくる。

…仕方ない。

「基地に戻れ。」

そうへりのパイロットに告げる。

同じくへりに乗った部下達も複雑な表情だ。

何人かは戻るなら、とアサルトライフルのマガジンを抜きコッキングレバーを引いてチャンバーを空にする。

ユーリはエジエクシヨンポートから弾き出された6・8mm弾をキヤッチすると抜いたマガジンに戻す。

「…不満ですか？」

不意にユーリがマガジンをベストのポーチに戻しながら問いかけてくる。

一瞬の間を置いてああ、と頷く。

「何故我々なんだ？別に今回の件はサーシャの残党が絡んでいるとも思えない。ならばS・O・A・T・Fに任せておけばいい。」

率直な意見だった。

我々はサーシャの残党を追わねばならないはずだったのに…。

なぜだ！？

皆も黙りこくってただ俯くだけだった。

11・神谷 夏蓮ノフランシス・アンダーソン（後書き）

チラリと出てきました「サーシャ」という人物。

Team Knivesと同じくリメイク予定の「INFECTI
ON」のキャラクターです。

これも中学時代の作品です。

Team Knivesの代表となる「四季シリーズ」を含めた「
入植」というキーワードは結構歴史あるシリーズなのです。

12・岸田 健児／岩倉 義一

昼食も食べ、十分に旅行を満喫した頃、俺たちは裏通りを歩いていた。

岩倉と成実は相変わらずだが・・・正直俺はここに何かあるような気がしてならなかった。

妙な感じがする。

なぜだろう？

「ん？」

成実がふと足を止めてある場所を凝視する。

裏路地に入ったところの打ち付けられた扉。

別に何の変哲もない扉だが・・・。

成実は長年の経験からか、何かあると分かっているようだった。

そして素早くドアを蹴り破ると中へ入っていった。

中は埃臭い。

正直長居はしたくなかった。

真っ暗だったが目が慣れてくるにつれて地下へと続く階段が見えた。後は事務所のようなだった。

「俺は事務所を調べる。二人は下へ。」

そう短く指示すると成実は事務所へと入っていった。

岩倉は成実の指示を受けて素早く階段を下りていく。当然銃を抜いて、だ。

ライトを点灯させて歩いていくがそれでも視界はかなり狭かった。が、何かの医療施設のように思えた。廊下の突き当たりの薄汚れた壁に取り付けられたプレートに何か書かれている。

「 研究室 実験室 」

二人は顔を見合わせると俺は研究室へ、岩倉は実験室へと向かった。

実験室の扉は容易に開いた。

鍵がかかっていなかった。

不思議に思いながらもゆっくりと足を踏み入れる。

と、ハンドガンを持った腕をひねられ銃を取り落とす。

誰かは知らないがその相手の腹に蹴りを入れると身体を丸めた相手の頭部に思い切りかかとを突き落とした。

悲鳴が上がっている内に銃をとってライトでそいつを照らす。

そいつは白衣を着た色黒の男だった。

髪の毛がくしゃくしゃで何とも小汚い。

だがどこかで見覚えがあった。

「 立て。 」

そう命令して相手を立たせる。

「何者だ？」

そう奴に問いつめる。

奴は首を振っただけだった。

何がしたいかは分かっている。

さっと振り向いて後ろに迫っていたもう一人の・・・女だ。

コチラは小太り。汚らしいのは分かっている。こいつもどこかで見えた顔だ。

とにかくそいつの顔面に蹴りを入れる。

鼻が折れたようで鼻血を出した相手に思い切り拳を突き出す。

女が倒れたところで男の方を見ると…男は逃げようと走り出していた。

待て、と叫ぶまもなく女が立ち上がって凄まじい力で掴みかかってくる。

そして大口を開ける。

まさか！！

素早く奴の頭部に4発ほど45ACPを撃ち込んで怯んだ隙にその手から逃れると残りの弾薬を一気に撃ち込んだ。

倒れた顔を見て気付く。

こいつは学生時代のクラスメートだ。

確か…小沼だ！

ならばさっきのは…。

実験室は部屋中が植物ツルに覆われていた。
あちらこちらにツルが絡み合っている。

ガラスケースの中には幾つかの植物が入れられていた。
だが特にこれと言って何だというものでもない。

むしろこのじめじめとした感じが嫌だった。
何だろう？

妙に嫌な感じだ。

奥まで進んで行くにつれてその感じは深まっていく。
不意に俺は足を取られ思い切り床にたたきつけられる。

銃が手から離れる。

足に、ツルが絡まっている。

そしてそれはどんどん俺を奥へと引き込もうとしている。

マズイ。

とっさにコートの裏に隠していたシースからナイフを引き抜いて思
い切りツルを切り刻んだ。

どこからか悲鳴ともつかない声上がる。
なんだ！？

素早く立ち上がって銃を掴むと四方八方から迫ってきたツルに撃ち
込みながら出口を目指した。

何度か躓きそうになりながらもドアを閉める。そして側にあった鉄
パイプでドアを塞ぐ。

そしてそのまま振り返らずに走り出した。

13・高橋 成実/佐藤 安弘

気絶させた奴が目を覚ましたので尋問しようとしたが何も喋ろうとしなかった。

俺はかがんだ状態で鼻を鳴らして言う。

「話すつもりが無いんだな？」

そう言うと奴は頷く。

「そうか。」

素早くコートの中からダークネスをとりだして一発撃ち込んだ。

奴の脳が破壊され、機能が停止する。

やれやれ、と立ち上がった瞬間オフィスに誰か入ってくるとつさに銃を向けると向こうも銃を向けていた。る。

相手が誰だか気付いてはっと、息を飲んだ。

何が何だか分からない！

自分が今銃を向けている相手は・・・成実！？

「な・・・なんでここに・・・？」

こっちは軍の指示でここに来たのに……。
痕跡を消せ、と。

なのに……。なぜ君がここに居るんだ!?

「安弘……。お前も……。」

くっ……。成実を撃つことは……到底不可能だった。

それは彼も同じようだった。

” 目撃者は排除する ”

それが出来ないのは問題があると分かっているのに……。

銃を下ろしてセーフティをかけてホルスターに戻すと彼も同じように銃をしまった。

「成実……どうして君は戻ったんだ? もう二度と会うはずじゃなかったのに……。」

成実のコートにはRAIVENの階級章が着いている。
つまり、彼は戻ってしまったのだ。

彼が言葉を探していると部下と思われる男が二人地下から走ってきた。

気まずい空気がその場に流れた。

「……とにかく、自分の仕事をしなくちゃいけない。だから君たちはもう行ってくれ……。」

そう言うと成実は一瞬の間を置いて外へと出て行った。

彼らが出て行った後、地下へと降りていくと研究室のコンピュータを立ち上げた。

そして実験室の制御プログラムを呼び出す。

「焼却」というボタンがある。

それを押して画面上にカウントダウンが表れている内に部屋を飛び出した。

14・岸田 健児／岩倉 義一

「彼は誰なんですか？」

メインストリートを歩きながら岩倉が成実に見尋ねる。成実は口をつぐんでいる。

なにか彼との間にあるのだろうか。

そして集合時間より1時間も早く集合場所にたどり着いた。

誰も居ない頃を見計らって成実はぼつりぼつりと語り出す。

「あいつの名前は佐藤 安弘。俺のカレッジ時代の親友だった。カレッジを卒業した後俺はSCARに、アイツは軍に入った。

SCARもMillionのお膝元だがアイツは…軍の特殊情報処理部隊に入ったんだ。

SCARとは対立関係にあるから当然、二人は会うことがないはずだったんだ。

だが今日…会ってしまった…。」

” 目撃者は排除しなくてはならない”

この言葉が今の俺に重くのし掛かった。

きつと二人とも心の葛藤があるのだろうか。

だからこそ…二人は強い友情で結ばれているとも言えるが。

「しかし…仕事上仕方がないのでは？」

岩倉の言葉にああ…と頷くと彼は俯いた。

高橋さんは相変わらず難しい顔をしていた。

辛いのだろう・・・。

旧友とこんな風に再会してしまったのだから。

お互いの立場を考えれば尚更だ。

彼のそんな様子を見ているのは自分でも辛かった。

もし、自分ならと考えてしまうから・・・。

今はただ彼を応援することしかできなかった。

15・佐藤 安弘 / 高橋 成実

仕事を終えて帰ろうか・・・と言うときに裏通りで数人の男達に囲まれる。

フン。弱々しいサソリ達だ。

彼らが銃を向けた瞬間身体は隼のごとく動き出した。

素早く正面の敵にドロップキックを食らわせると着地する前にホルスターから銃を抜く。

着地したときには既に照準が定まっている。

素早く敵に撃ち込んでやる。

一気に2人の頭に9mm弾を撃ち込むとたじろいでいる一人を思いきり蹴り飛ばした。

全員が動かなくなったところで本当に帰路につく。

「...出来れば、こんなことしたくないのにな...。」

そう呟くと再び足を進めた。

宿泊場所のホテルに着いた。

部屋割りには男女別でグループに分けられていた。

俺は岩倉と岸田と同室だ。

だが俺は正直、それどころではなかった。

吐き気がする。そして寒気。

そして妙にどつと噴き出す汗。

旧学級委員の説明が終わると同時に、渡された鍵を持って俺はさっそうとエレベーターに乗り込んだ。岸田と岩倉が後に続く。

「どつかしましたか？」

岩倉の言葉に頷くのが精一杯だった。

マズイ……。ここまで来ると……。

エレベーターが目的の階についた。降りると突然全身に激しい痛みが襲う。痛みにも身体をこわばらせる。

岩倉に支えられて部屋に運ばれる。意識が朦朧としている。

俺はバスルームへ向かった。そして鍵を閉める。

「岩倉…、何かあつたら頼む…」

そう言い終わらないうちに激しく咳き込む。手には鮮やかな血が滴っている。

そして激痛が身体を襲い、激しい鼓動と共に俺の意識は完全にロストした。

16・岸田 健児／高橋 成美

成実がバスルームに消えてから2時間が経過した。

「岩倉、アイツ死んだじゃないか？」

岩倉に冗談半分で言う。

「こんな時に良く冗談が言えるな！もし……。」

もし、の先は分かっている。

”もし彼らの一つになったら”ということだ。

「敵に回したくないよな……。」

ポツリと呟くと岩倉は頷いた。

目を覚ましてゆっくりと身体を持ち上げようとする。
が、違和感を感じる。

妙に胸の辺りが重い……。

身体を起こして座り込む。

吐血した血が床にかかって乾いていた。

まだ頭がくらくらしていた。

そして同時に襲ってくる全身の痛み。

洗面台につかまるようにして身体を起こす。
激しい痛みにぐずれ落ちそうになりながらも何とか身体を保つ。

ふと姿見が目にはいる。

と・・・そこに映っていた姿は・・・。

「えっ！？これ…？どういうこと！？」

そしてさらにはっとして口を手で覆う。

鏡に映ったその姿は…。

女を主張する胸の膨らみ。

髪も伸びた…？

こ・・・これは・・・。

瞬きをして再度確認する。

・・・幻でも見てるんじゃない…。

間違いなく、そこにはロングヘアの女が立っていた。

いかにも具合が悪そうな顔。

… 実際具合が悪いので仕方ないが。

確かにEが身体を攻撃してもEとの相性によっては死なないことも知られている。

そしてその場合は意識を保ちながらもまた別の物に変化することも。

その際にホルモンバランスが変動することは…あり得るがここまで…。

まさかここまで変化が早いとは思っても見なかった。

腕時計は7：45を指している。

…つまりせいぜい2時間で変化したことになるのだ。

どうやら身体が痛いのは骨格や皮膚など細部も含めた急激な変化のせいらしかった。

口を手で覆ったまま鏡を凝視する。

とにかく…何とかしないと…。

とは言っても今バスルームから出れば…。

少々青ざめる。

あの二人はこの仕事をして長いが…同じ部屋に女一人いればどうだろう…？

あまり安心できないのが本心だった。

…そつだ。

あることを思いついて携帯電話を取り出す。
そして夏蓮にメールをする。

夏蓮へ

ちょっと大変なことになったからとにかく部屋まで来て！
状況は会って説明するから！！

岸田が何か言うと思うけど私に呼ばれたと言えば何とかなるから！！

そうメールを打って暫く待つ…。

するとドアをノックする声が聞こえ岸田が誰かと口論する声が聞こえる。

だが直ぐに誰かが入ってきてバスルームのドアを叩く。

「私よ。開けて？」

その声を聞いてバスルームのドアを開ける。

夏蓮が「何？」という表情をして中に入って来るなり鍵をかける。

そして夏蓮はこちらをよく観察すると…驚いて「えっ!？」し声を上げて手で口を塞いだ。

「一体…どういう…?」

「さあ…私にもさっぱり…。」

今の私は女なので男言葉を使っても不釣り合いなただけだ。素早く女言葉に移行していた。

「…とにかく私はどうすればいいのかしら?」

夏蓮も首をひねる。

事実上、今の容姿が成実の頃とはかけ離れているし、たとえそうでなくてもどういふ事が説明を付けづらい。少なくとも部屋を変えるべきだろう…。

「とにかく部屋を一つ増やして貰うわ。岸田達には…取り合えず一旦街に戻ったことにしておけと伝えておいて？」

夏蓮が頷く。

そして私は夏蓮を先にバスルームから出す。

そしてまた騒がしい音が聞こえた後、静かになって夏蓮が来ても良いと合図する。

私はバスルーム、そして部屋を出るとはあと溜め息をついた。

17・岸田 健児

「高橋さん…大丈夫でしょうか…？」

岩倉がポツリと呟いた。

確かに心配だが…。

俺たちに姿を見せようとしなかったのが気にかかる。
何故だろうか？

「まあ大丈夫だろ。成実のことだ。そんなに簡単に死なないだろ。」

その後二人で考え込んだ。

途中何度か夏蓮が部屋を出入りして成実の荷物を持ち去っていった。
彼女に様子を訊いても明確な答えが返ってこない。

奴を殴りたくなる衝動をぐっとこらえていると腹が鳴り出す。

くっ…成実の事も気にかかるが…食欲には勝てん…。

「岩倉…ちよつと良いか？」

そう言うと岩倉が顔を上げる。

なんだ？と言わんばかりの表情の彼に言う。

「夕食が食いたいんだが…。」

そう言うと彼も頷いた。

「確かにな。俺もそう思ったところだ。…バスルームを掃除してか

ら行こうか。」

そう言っつて彼は立ち上がつてバスルームへと向かった。
俺も後を追う。

バスルームは床に乾いた血がこびりついていたが拭き取るのは造作もないことだった。

素早く拭き取つてタオルを見るとあることに気が付いた。

髪の毛…？

だがやけに長い。夏蓮…もこんなに長くないし…。

「どうした？」

岩倉に声をかけられハツと我に戻る。

何でもない、と返事をして岩倉に続いて部屋を出た。

痛みは引いたが頭がくらくらした。

熱もあるようで、夏蓮が濡れたタオルを額に乗せていた。

ベッドの上に横たわりながら考える。

いつまでこんなのが続くのか…と。

「大丈夫？」

私の様子を見かねて夏蓮が声をかける。

そう言えば夏蓮との関係もどうなっちゃうのかな…。

「大丈夫？」

夏蓮が再度私に問いかける。

私は頷くと夏蓮に目を閉じられた。

「今は眠ってて？ね？」

彼女の言葉に「うん・・・」と頷くと私は眠りに落ちた。

取り合えず軽く自分の食べる分を持って席に着くと既に岸田が大量の食事を持って座っていた。

「どうかしたか？」

怪訝な顔をして席に着いた俺に岸田が問う。

「良くまあ…そんなに食べられるのか？」

もちろんだ、と彼は頷く。

「むしろお前はそんな量で足りるのか？」

俺の皿を指さして言う。

「あんな、バイキングってというのは少しずつものをとって食べるものなんだぞ？」

へーという顔の岸田に溜め息をついて俺は食事を始めた。

目を覚ましてゆっくりと起きあがる。
脇で眠っていた夏蓮も起きる。

「あら、起きたの？」

その言葉に頷く。

もう先刻までの不快感はない。

よし。

ゆっくりとベッドから立ち上がる。

「大丈夫なの？」

ええ。と頷いてから少し間を置いて言う。

「お腹空いたな…夕食にしてもいいかしら？」

そう言うと彼女は微笑んだ。

一階に着くとバイキングAではなくBを選択した。

Aの方は同窓生だらけで落ち着けないだろうと判断したからだ。

夏蓮もそれに着いてくる。

一旦席に着いてから言う。

「無理して着いてこなくてもいいのよ？」

「ううん。一人にしておけない。また倒れたらどうするの？」

…彼女は頑固である。

それは今までの経験から言っただけで分かり切っていた。だから別にそれ以上何も言わなかった。

そして優雅なディナーを楽しんだ後、私達は部屋へ戻っていった。

部屋に戻ってくると私は早速ベッドに横たわる。

今までの吐血症状から解放された喜びから…だろうが。

「それより成美、先にシャワーでも浴びたら？」

夏蓮が言う。それに頷いて

「うん。そうする…ってなに！？成美って!？」

驚いて起きあがった私に悪びれた様子もなく告げる。

「もう女なんだから成実じゃあ変だし…ちょっと変えただけよ？」

それを聞いてベッドに倒れ込む。

もう…決定早いよ…。

「どうかした？」

彼女の問いかけに首を振ってから起きあがるとバスルームへと向かう。

バスルームで制服を脱ぐと姿見がまたしても目にはいる。

やっぱり女なんだよねえ…。

と、全て脱いでからあることに気付く。

あ、え〜と…まあ後からでいいや。

自分にそう言い聞かせてバスのカーテンを閉め、シャワーを浴び始める。

さっきまで汗だくで苦しんでいたのだから疲れが一気に出ていくこと。

ロングヘアって乾かすのが大変そう…。

そう思いながらシャワーの栓をひねるとバスタオルを身体に巻いて
夏蓮を呼ぶ。

そして顔を真っ赤にしながら夏蓮にそっと心配なことを打ち明けた。

「おい岸田！しっかりしてくれ！！俺が恥ずかしい！」

…俺の予想通り、岸田は…

「もう駄目…。腹痛い…。」

食い過ぎで腹痛を起こすという何とも無惨な結果になった。

このバカ…。だから計算しろと…。

周りの同窓生の視線が痛いっ！！

今の俺は岸田の手を方に回して引きずってやっているところだった。

「ったく！！成実が居ないからって食い過ぎだ！！！」

悪態を付いてなんとかベッドの上に岸田を放り投げるとぐったりとその場に倒れ込んだ。

「本当に恥ずかしかった…。」

そう言っつて溜め息をつく。

「ん！？」

あることに気付いて思わず声を上げる。

目の前には…既に寝息を立て始める岸田。

こっ…こいつは…。人に迷惑かけた上に…。

こらえる俺！こらえるんだ！！

固めた拳をふるわせながら俺はバスルームへと向かった。

取り合えず夏蓮のネグリジエを借りて今日は眠ることにする。
既に歯磨きもお手洗いも済んだし。後は寝るだけ。

ベッドに入ると夏蓮がやってきて「お似合いね」といってクスクス笑う。

むっとする私に「ゴメンゴメン」と平謝りをすると明日の予定について話し合った。

「取り合えずは街で買い物ね。いろいろ買わないと……。あ、でも最低限でいいわね。荷物が多くなっちゃうし。家に帰ってからでもいいわね。」

頷く私は既に目蓋がおも〜くなっており……。

「お疲れみたいね。まあ無理はないかもしれないけど。明日は7時には来るわ。…それじゃお休み。」

そう言ってサイドテーブルのスタンドを消される。

そしてドアが閉まると同時に私は完全に目蓋を閉じてスースーと以前では考えられないような可愛らしい寝息を立てて夢の世界へと旅立った。

20・岸田 健児

チャキン、という金属音に寝返りを打つ。
もつと寝かせてくれよ。

そう思いながら重いまぶたを開けるとテーブルで岩倉が何か作業をしていた。

「…何してるんだ？」

目をこすりながら岩倉に問うと彼は一瞬振り向くと直ぐテーブルの方へと目をやる。

「ただの銃のクリーニングだ。今日も11発撃ったしな。」

淡々と語る彼を見てあぐらをかいていった。

「…お前神経質って言われること無いか？」

「いや。」

短く答えて岩倉がさらに何かをする。

と、同時に異臭がする！！

「まさか・・・」

近付くと…やっぱりだ！！

「だああああ！！こんなところでボアクリーニングするな！！ソ

ンベルトがあああ!!」

既に発狂。

布団に顔を埋めて叫ぶ。

「高橋さんなんてあの廃墟で既に済ませていたし…まあ俺は道具がなかったが…」

そして岩倉がクリーニングを完了し消臭剤をばらまいたところでやつと外へ出る。

「岩倉・・・頼むからもう止めてくれ…。」

岩倉は聞く耳持たずだ。

銃にオイルをさして組み上げるとマガジンに装填して銃をコックしておく。

そしてサムセーフティーをかけるとサイドテーブルへと置いた。

その後彼は上着を脱いで制服もシャツとズボンというラフな格好になつてから布団に寝ころんだ。

そして直ぐに寝込んでしまった。

ちくしょー。俺はソンベルトのせいで眠気も吹っ飛んだって言うのに…。

俺はブツブツと愚痴を言いながら寝付くのを待った。

21・新谷 夏蓮

誰も廊下にいないのを見計らって成美から借りた鍵で部屋のドアを開ける。

カーテンが閉じられている薄暗い部屋をゆっくりと歩いていく。

カーテンをそ〜っと開けると天使のような可愛らしい寝顔の女の子がスヤスヤと寝息を立てて寝ていた。

かっ…かわいい…。

カメラで写真を撮ろうとすると寝返りをうたれる。

も〜!!せつかく人が…。

まあ仕方ないか。

「成美、起きて。」

そう言っただけ揺さぶるも「う〜ん」というやる気のない寝言なのか…とにかく妙な声が出てくるだけ…。

う〜ん起きないか…。

あっ!!これならどうだ〜!!

勝ち誇った表情で天使の頬にキスしてみる。

「…ほえ?」

なんともマヌケで可愛らしい声と共に寝ぼけ眼でこちらを振り向く。

「おはよう」

「うん……もうちょっと寝かせて……」

声をかけてもこの始末。

しかも二度寝!?

またしても安らかな吐息が……。

「仕方ない……。こうなったら……」

これだけはしたくなかったようなしたかったような……。

微妙な心境のまま、お嬢さんのベッドの中にお邪魔して背後からその柔らかい女の象徴をわしずかみにする。

「きゃ!!!!!」

叫ぶと同時に飛び起きた彼女は身体がだるそう……。

そりゃあ低血圧でたたき起こされちゃあ無理もないよね……。いや、揉み起こされるか(笑)

「なんなのよ……」

「あらら、成美ちゃん。すっかり女の子に適應しちゃったみたいね。起きて。」

「もう……このスケベ。」

「なっ……」

それが朝起きて直ぐに言う言葉か……!!

ってまあ確かに私が悪いんだけど…。

彼女は起きあがると着替えを始めたので私はそれまで椅子に座っていた。

着替え終わるとすっかり美人の女の子はあと

「?どうかした?」

にやついている私に聞いてくる。

だってその格好…制服…だよな?

でも…可愛い…。

笑いをこらえきれずとうとう笑い出す。

彼女はむすつとして「なに?」と聞いてきたが答える余裕がない。

笑いが収まってきててようやく「可愛いんだもん」といって顔を真

っ赤にして俯いた。

まあ複雑な心境だろうけどかわいいよ?

初々しい女の子ってかんじで(笑)

朝食を取りに行くと…あれっ!?

バイキングだが…戻ってきた彼女の手にはっ!?

えっ…えっ?

「どうしたの?」

驚く私にそう言うけど…でも、大丈夫なの？

「それ…何？食べて大丈夫なの？」

「え？このイチゴシヨートケーキ？別に大丈夫って言うか…なんだから甘いものが食べたくて…。」

そういつて彼女はトーストとベーコン、スクランブルエッグと…洋食を平らげてからイチゴシヨートをゆっくりとお召し上がりになれました（笑）

でも今日は大変だし。仕方ないかもね。

22・岸田 健児／高橋 成美

「起きろ！！朝食に行くぞ。」

そう言つて頭をSLEEで軽く殴られる。

「いでっ！！」と声を上げて起きる。

「なんだよ。人が良い夢見てたつて言うのに・・・。」

と抗議すると岩倉は鼻で笑つて。

「へえ。鼻の下伸ばしてマヌケズラで見る夢とは一体どのようなものか聞いてみたい。」

そう言つて岩倉は一足先に部屋を出て行つた。

「え？え？」

後に残された俺はただ呆然とするしかなかった。

が、急いで着替えると岩倉を追つてバイキングへと向かう。

既に人でごつた返していた。

あっちゃあ・・・もっと早く来れば良かった。

席に着いたときには既に岩倉は食事全体の50%は食べ終えていた。

「・・・寝癖ぐらい直してこい。」

またしても突つ込まれたあ~~~~！！いつになったら俺が突つ込む

立場になれるんだ！！

寝癖をかき乱しながらむすっとした表情を浮かべ食べ始める。

食事を食べ終えるまで岩倉は一切口を開かなかった。

なんか最近ますます冷たくなってきたなあ・・・と思いながら部屋に戻ると直ぐに支度を始める。

一通り支度が終わるとハンドガンをホルスターに納めてロビーへと移動した。

「そろそろ戻って準備をしましょうか？」

コーヒーを飲み終えた私は夏蓮に言う。

「ええ。でも、あなたは何を使うの？」

確かに移動手段が・・・いや別に困らない。

「車で行く。合流地点も分かってるし。」

目を丸くする彼女を尻目に私は食器を下げに移動した。

部屋に戻ると一旦夏蓮は自分の部屋へと荷物の整理に行った。

私は…バッグに一通り荷物を詰め込むと最後に用意すべきものを手に取った。

二丁のハンドガン。

手のサイズは…大丈夫。

あとは筋力か…。

構えて腕を伸ばす。

あれ？軽い？

なんと男の時より軽く感じるのだ。腕は以前より細身なのに…

何で!?

あ…。。

やっと気付いて腕が止まる。

…E…。。か。

少し、やりきれない気持ちになって泣きそうになった。

いや…。。実際涙が出てきた。

こらえようと思ってもこらえられない涙。

銃をホルスターに入れてもまだ落ち着かず、そのままベッドの脇で泣いていた。

私は…もう…。。

頭の中がこんがらがって、何がどういつらさなのか分からなかった。

いろんな気持ち混ぜり合って、私を混乱させていた。

でも、悲しかった。辛かった…。

その内ドアがノックされ、重い足取りでドアを開けると夏蓮がいた。彼女は私の様子を見ると驚いた表情をした。

私は無我夢中で部屋に入ってきた彼女に抱きついて、ただ泣き続けた。

「大丈夫？辛かったら、泣いていいから…。私はちゃんとここにいるから…。」

私はただ彼女に抱きついて泣き続けた。

23・新谷 夏蓮／高橋 成美

バスの席に着くとちよつと寂しいな。
隣にいるはずの君が居なくて。

こんな時だからこそ一緒にいたい。
でも居ると不自然だから出来ないんだよね。

「夏蓮、成実が居なくて寂しいんでしょ」

なんて友達に言われるけどあながち間違つてはいない。
だって私達、これからどうすればいいのか分からないんだもん。

一緒にいて、いいの？
やっぱり女同士だからダメ？

どうしても分からない。
…どうすればいいのかなあ…。

動き出す景色。
成美との距離が離れていく。
言いようのない寂しさを抱えながら私は俯いた。

まだ、鼻をすすりながら私も出発する。
既に車は到着していた。

車に乗り込むと私はハンドルを握ったまま少しの間ためらった。

何だか…怖いよ…。

答えを聞くのが…。

私、やっぱり夏蓮が居ないと一人なんだね。

慣れてると思ったのに…やっぱり慣れて無くて…。

やっぱり側にいて欲しくて…。

その想いは、ずっと変わらない。

夏蓮の元を離れてRAIVENとして働いていたもそう。

仕事を終えて帰宅しても、誰も居ない…。

時々「どうしてるんだろう」とか「会いたいな」とは思っても私には出来ないことだと思ってた。

受け入れてたけどやっぱり寂しかったんだ…。

私はその寂しさを無理やり消すようにエンジンをかけた。

24・藤川 祐一／岩倉 義一

洋子を連れて街を歩いていく俺の制服についたカラスの紋章。俺の居場所はやはりここしかないのだと実感する。どうしても、逃げる事が出来なくて。

洋子もCROWに昇進された。

だが今すべき事と言えば・・・成実との約束を果たす為に岸田と岩倉を捜すことだった。

あいつらのことだ。騒ぎには直ぐ反応するだろうからバイオエフェクトの現場に向かえば問題ないだろう・・・。

それまではこの街の中を徘徊するしかない。

特にやることがないのだが。

と、思えば向こうにバスが止まり、そこから退屈そうな二人が降りてきたのを見て微笑んだ。

バスから降りるなり岸田が溜め息をつく。

財布を忘れたかららしいが……うるさい、うるさすぎる。

「げ。」

その岸田が突然声を上げる。

何事かと思っただけを注意深く見渡せば…藤川さんだ。

俺は迷わず彼の方へ向かって歩いていった。

彼の後ろには洋子もいた。

「元気だったか？」

「ええ。岸田も相変わらずですが何とか。」

岸田は相変わらず暗い顔。

きつちり仕事してくれればそれで良いが…。

「それはそうと…だ、俺がわざわざ来たのは高橋との約束を果たす為だ。」

「高橋さん…ですか？」

彼が一体藤川さんに頼むこととは何だったのだろうか？

「実は…高橋は今少々マズイ状態らしくてね。お前達の上司を臨時に務めることになった。…とはいえ任務内容は変わりはない。」

「分かりました。しかし…高橋さんは今どこに…？」

俺がそう尋ねると彼は「分からない」と首を振った。

だが今の俺には高橋さんにとんでもないことが起こっているような気がしてならなかった。

25・高橋 成美

待ち合わせ場所で暫くブーツとしていると突然目の前でバチンと手を叩かれた。

ハツとして顔を上げると夏蓮だ。

「ごめん、待たせちゃった？」

夏蓮が心配そうに訊いてくる。

「ううん。そうでもないよ？」

とは言ったものの私自身、いつからここにいたのかなんて覚えてない。

それ以上に、不安なことがいっぱいあったから……。

「ん〜じゃあ行くこっか？」

「うん。」

そう言って行った先はといえばデパート。

買う物が色々……。

「あれもいいなあ……でもこれもいいし……どうしようっ？」

「でも細かいものは旅行が終わってからで良いじゃない。」

あれやこれやと色々な服を物色する夏蓮に突っ込む。

「そうね。まずは……。」

と言って買いに行ったのは……。

買ってから夏蓮が振り向いて言う。

「どうしたの成美ちゃん。顔真つ赤じゃない。」

「だって……ねえ……。」

夏蓮……いくら私でも恥ずかしいわよ……下着買うのなんて初めてだから……。

そう思うとさらに顔が赤くなる。

ううう誰か……。

「でも許せない!!成美の方が凹凸でかくて……!!」

「なっ……。こっ、こんなところで何言ってるの!?!」

そう。ここはまだ街の中ですよ……。

こんどは夏蓮が赤くなる番だった。

一足先にホテルに戻って買ってきた物を整理する。
ううう恥ずかしい……。

まあ、それはそうとどうもこんなに平和すぎても身体が鈍ってしま

うような気がした。

でも、一人で居るとやっぱり不安。
どうすればいいのか…分からなくて…。怖くて…。

その場に崩れ落ちてしまった私。
ねえ、私はどうすればいいの…？

26・新谷 夏蓮

すっかり遅くなってしまう慌てて成美の部屋に行く。
ノックしても出てこない…。
つて、よく見たらドアも閉まりきってないし…。
知らない人が入ってたらどうするのよ!?

そう思いながら部屋の中にはいるとベッドの上に俯せになって成美は眠っていた。

目の縁に涙の跡が付いている。

きつと、不安だったのだろう。

私と同じ気持ち。

同じように不安なんだ。

それを分かってやれなかった自分自身に腹が立ち、同時に申し訳なく思った。

ベッドの上へ上がって彼女を後ろから抱きしめる。

「分かってあげられなくて…ゴメンね…。」

そう言っ私も怒りと悲しみが入り交じった雫を落とした。

暫くして成美が目を覚ます。

「…夏蓮…？」

彼女は私の顔を見てまた涙を流す。

「ゴメンね。辛かったよね。私も気付いてあげられなくて…ゴメンね。私…あなたも不安だったって事…。」

涙混じりの声でただ彼女に謝り続けた。

でも彼女も泣きながら、私の気持ちを理解していてくれた。

「いいの…。。一緒にいらなくても好き…。」

そう言う彼女に私は頷いていた。

その後はというとディナーをとって、シャワーを浴びていた。私が先に浴びて、成美が後に入った。

ドライヤーで髪を乾かしている私。

そしてカーテン越しの成美。

が、私の悪戯心がここで刺激された。

バスのカーテンをえいやっ！！と開ける。

一瞬驚いたと言うより何が起こったのか分からないような顔。

そして間を置いて「きゃあああああ！！！！」という悲鳴。

「やっぱりスタイル抜群ね〜。羨ましい〜。」

「羨ましい、じゃないっ!!はっ、早く閉めてよ!!」

胸を隠してしゃがみ込んでいる彼女。

顔を真っ赤にして、可愛らしい。

こういう反応をされるともうちょっと楽しみたくなっちゃうんだよね。

悲鳴をあげる彼女をあれやこれやともてあそび続けた。

27・藤川 祐一／岩倉 義一

真つ暗になった地下のホールで俺は彼女に出会った。
杏子だ。

「岸田と岩倉は大丈夫みたいね。まああなたの下なら間違いないとは思っけど。」

「だが安心もしてられないだろう。俺には分かる。」

ええ、と彼女が頷いたとき、どこかで悲鳴が上がった。

「行きましょう。」

俺は頷くとその声の方へと走り始めた。

部屋で眠っていれば悲鳴が聞こえた。
飛び起きて素早く銃をとる。
岸田も素早く銃をコックする。

ドアを開けて廊下の様子をうかがうと島田と工藤が宿泊客の一人を押し倒していた。

島田と工藤は・・・皮膚が裂け、血を流している。

高周波の高い音を出して、口から触手を出して。

周りの同窓生達も恐れをなしている。

素速く銃を向ける。

が、後ろから声がした。

「おやおや、カラスか。丁度良い。」

後ろを振り向くと3人の男が廊下の向こうでこちらに銃を向けていた。

「何が目的だ？」

俺が問うとさらに一人の男が廊下の向こうから姿を現した。

「お前は！！」

岸田が声を上げる。

知り合いか！？

相手も似たような反応だ。

「丁度良い。お前達に聞こうか。…高橋 成実は何処にいる？」

怒りをあらわにした奴は銃を向けたままこちらにやって来る。

それに合わせて島田と工藤もこちらへ近付いてくる。

「もう一度聞けど。高橋 成実は何処にいる？」

銃を構えた奴に俺は言う。

「…知らないね。」

そう言うと同時に俺はホルスターからもう一丁の銃を取り出して奴の顔めがけて振った。

奴の顔から血が流れる。

何が何だか分からないといった様子だ。

その隙に素速く工藤と島田を撃ち殺す。

岸田は男に銃を突きつける。

俺はさらに廊下の奥にいた手下とおぼしき男達を捉えようとしたが逃げられた。

「流石はやつの部下だが…甘い。」

そう言うと奴は凄まじい速さで岸田を突き飛ばす。

マズイ。

俺の回避が遅れると俺の後ろから宿泊客達が押し寄せてくる。
なっ!?!?

振り返ると宿泊客達が奴らの一員になり下がっていた。

中には同窓生もいたが…殆どの奴らは部屋に立てこもっていた。

恐ろしい形相をしたつり目の男は俺に銃を向けた。

万事休す。

そう思ったとき廊下に銃声が響く。

奴の腕から血が流れる。

「大丈夫か!？」

藤川さんだ。助けに来てくれたのか…。

だが問題はその男がさほど怯む様子もないことだった。

奴は俺に掴みかかると素速く壁に向かってたたきつけた。

凄まじい激痛に顔を歪める。

そして同時にホテルの中の電気が消える。

どうやらさっきの逃げていった男達が何かしてくれたいらしい。

ありがたいな、この野郎。

そして奴は倒れている岸田に掴みかかると藤川さんめがけて投げつけた。

藤川さんは何とか岸田を受け止めたがそのスキに藤川さんに接近して殴りかかる。

俺はというとEを相手にするのに精一杯。

マズイ。

その時どこかで銃をコッキングする音がした。

そして次の瞬間にはEがバタバタと倒れていく。

何事かと振り向いたつり目の男にも一瞬の間を置いて弾丸が撃ち込まれていった。

驚いた表情の奴の視線の先には長い黒髪の女性が月明かりに照らされ、スライドストップのかかった銃を持って立って居た。

なにか強い意志を感じさせる、瞳。
かつ冷たい目で奴をひたと見据えていた。

奴は短く笑うと窓ガラスを突き破って外へと逃げていった。

何が起こったのかも分からず俺たちはその場に固まっていた。
この女性は一体誰なのか、と。

だがRAIVENの紋章とそのSLEのカスタムは…。

「せ…成実なのか…？」

藤川さんが呟く。

彼女は口の端を釣り上げて笑うと一瞬のうちに2丁の銃のマガジンを交換してその場を離れた。

28・高橋 成美 / ジェシカ・ロドリゲス

はるか、上の階で悲鳴が聞こえた後、私は夏蓮を見た。

「…お仕事ね。」

夏蓮はどこか寂しそうな眼で私を見た。

「私は必ず戻ってくるから…。」

そう言つて夏蓮にキスをする。

端から見れば単なるレズだろうけど、今の私達にはいろんな意味がある。

だから…。

私は部屋を飛び出して上の階へと上つていった。

廊下では岩倉達が死闘を繰り広げていた。

私は先ずダークネスをホルスターから抜いて岩倉に襲いかかるEを撃ち倒す。

そして振り向いた奴にエターナルを抜いて8発の45ACPを撃ち込む。

奴は苦笑いをして窓から逃げた。

奴の行き先は分からない。

だが私は他の階へと逃げていったEを始末しなくてはならなかった。

夏蓮…私はすべてが終わったとき、あなたの顔を見ることが出来るかな…。

そう思いながら上の階へと向かった。

何も考えないで、ただ目の前の敵を殲滅することだけに集中した。

ハンドガンの弾が切れ、スライドストップがかかる。

敵が目の前に迫っているが動揺もせず、タクティカルナイフを取り出して敵を切り刻んだ。

地面に倒れようとする敵を蹴り飛ばして他の敵にぶつける。

その際に私はマガジンを交換する。

マガジンを交換して射撃を始める前に、敵が倒れた。
何故？

暗闇の向こうに見覚えのある人物が銃を構えていた。

ホテルに潜入した私を待っていたのは…。
この雰囲気…。

「…成実ね。…辛いでしょ…」。

私は最後まで言葉を発しなかった。

廊下の脇から姿を現したサソリを撃ち殺す。

そして彼の持つていたM4とマガジンを今は強い意志を持った女性と化した成実に渡す。

「あなたは守りたいものがある。そうでしょう？なら、行きなさい。」

「

そう言って彼女に銃を渡すと私は自分の仕事に戻った。

29・高野 杏子 / 山中 啓

藤川：大丈夫かしら？

さっき話した感じじゃあ大丈夫だとは思うけど…彼も万全じゃない。いつ、どんな事態が起こるか分からない。

そう、今の私のように。

電力供給室でサソリを殺したのは良いが…。

殺したサソリの身体からEが出てきてしまった。

ハンドガンで応戦し、何とか奴を殺すことには成功したが…。

電力はもう供給できないだろう。

奴が死に際に装置を破壊してくれたのだから。

「どうしようかしら…。」

だが考えていても仕方がない。

私はさっと扉に向かって歩き出した。

まさか高橋 成実が姿を変えていたとは…。
思いもしなかった。

苦笑いして一時退散の為の準備をする。
装備を捨てて車に乗れば済むだけだ。

周りのEの分子達も2、3体連れて行く予定だった。それで十分だった。

よし、と立ち上がろうとすると周りのEたちが倒れる。そしてハンドガンのハンマーを倒す音が聞こえた。

振り向くと月明かりの下、長い髪を風でなびかせながら冷たい視線を向けた高橋がハンドガンをこちらに向けて立っていた。

ドクン。

ひととき大きく鼓動があった。

奴は近い。

私にはそれが分かった。

だから素速く敵を倒し、屋上へと向かっていった。

その間はただ無心に敵を殲滅させていった。

後始末は私の仕事ではない。

そして屋上へと続く非常階段を駆け上り、ドアを開くとEの分子と奴が居た。

先ずは邪魔なEを殺す。

5・56mm小口径高速弾を敵の頭に数発撃ち込んでやった。

そして弾が切れたスリングで吊られたM4を背中側へ追いやってホルスターからダークネスを抜いて構える。

奴が振り向く。目が合う。

ドクン。

鼓動が大きく鳴り響く。

Eが共鳴している。

当然だ。私と彼はある意味では兄妹なのだ。

同じEから生まれたのだから。

「私の中の奴らは貴方と同じ…だから貴方がこの私から逃げられるはずがないのよ…。」

私はゆっくりとダークネスのトリガーを絞る。

だが一瞬の差で私の身体に何かが起こった。

一瞬、電流が走ったような痛みを感じ、力が抜ける。
ガクツと身体が崩れる。

そして奴が立ち上がる。

奴は笑っている。勝利を確信していた。

「だが力は俺の方が上だ。」

そう言つて懐からハンドガンを抜いて私に向ける。

私は瞼を閉じてその瞬間を覚悟した。

…一発。

ブレットは放たれた。

ハンマーが落ち、ファイアリングピンが押され、カートリッジのリムを叩く。

それにより発火した火薬は凄まじい圧力を持ってブレットをチャンバーからバレルへと導く。

ライフリングにより回転したブレットはそのまま高スピードでマズルを抜け、空中へと飛び出す。

そして風の影響を捉えながらもターゲットに深々と突き刺さった。

私はハッと目を開ける。

撃たれたのは奴の方だった。

一体…。

振り向くと夏蓮が1911を持って、立っていた。
両手でしっかりとグリップした銃から放たれたブレットは奴の体内で潰れた。

そして体内に留まったまま…心臓を貫いた後で静止していた。

溢れる血を垂らしながら奴は地面へと堕ちていった。

銃を構えた腕をゆっくりと下ろして、よろよろと成美の後ろに膝をついて彼女の背にしがみつく。

怖かった……。ほんとに怖かった……。

私も、成美も死んじゃうんじゃないかって……。怖かった……。

自然と私は嗚咽を漏らし、涙が流れ始めていた。
そんな私を成美は優しく抱き留めてくれた。

31・高野 杏子/高橋 成美

ホテルの周囲を警戒する。

Eは既に外へと溢れ出していた。

私達は彼らを食いとどめられそうにない。

だが收拾できる程度の事態なので特に危機感を感じていなかった。

問題は・・・既にこのホテルにはS・C・A・R、S・O・A・

T・F、S A I G A、センチュリオン、そしてフェニックスが入

り乱れていると言うことだ。

どう考えてもこのままではマズイ。私とて誰かと接触するのは好ましくない。

藤川達とて同様だ。

ホテルの裏まで来たとき私は山中が横たわっているのを見つけた。

・・・死んでいるのだろうか？

私はゆっくりと彼の側まで歩いていき、側に落ちているハンドガンを手に取った。

9mmパラベラム仕様の1911。

あら？

私はふと、あることに気が付いた。

これはS L Eだ。確かに仕様は古い。プロトタイプ、つまり試作段階のS L Eだ。

何か手がかりがないかとよく調べてみればこれはドイツ仕様だ。

しかも…この刻印は…。

そこに入っていた刻印、それこそ”U・S・M i l l i o n”だっ

た。

私はゆっくりと後ずさりする。

まさか…誰かが彼にSLEを与えた…？

でも、何の為に…？

私がホルスターにその銃をしまったとたん山中が立ち上がった。
な…。

彼は私を見ている。

彼のその威圧感にたじろぐ。彼は一気に私を殺す気だ。私は確信した。

だがその彼に2発の銃弾が叩き込まれた。

彼が振り向いた先にいたのは…安弘と恵美だった。

フェニックスの二人とここで会うのはマズイがチャンスだ。

一気にとどめを刺そうと銃を奴に向けた瞬間、奴は凄まじい勢いで森の中へと消えていった。

深追いはよそう。無駄に身を危険にさらすべきではない。

私は助けにくれた二人に礼を述べる。

だが安弘は単刀直入に聞いてきた。

「僕たちは成実に会わなくちゃいけないんだ。彼は何処に居るんだ？」

私は一瞬の間を置いて答える。

「成実はもう居ないわ。でも彼の心はまだ生きてる。」

困惑する彼らに私は手招きをする。

「来なさい。あなた達がどういう反応をするかは知らないけど。」

夏蓮としっかりと抱き合っていたがはっと、息を飲む。

奴が移動した。

奴はまだ生きて居るんだ！！

「どうしたの？」

夏蓮が澄んだ瞳で訊いてくる。

「あいつが動いた。まだ生きてる！」

そう言うとさっと立ち上がる。

早く奴を追わなくては、そして夏蓮をこんな所にいつまでも居させるわけには行かなかった。

夏蓮を立たせるとドアが開く。

そして現れたのは…。

「安弘…、恵美…。」

「き…君は…せ…成実なの？」

困惑する彼にゆっくり頷いてみせる。

「一体…何があったって言うの？」

恵美も困惑している。当然だ。でも…。

「とにかく、私は今こんな事をしてる場合じゃないのよ！アイツを追わなきゃ…」

「成実…君に伝えなくちゃならないことがあるんだ…」

この場を離れようとする私に安弘は暗い表情で告げる。

「僕も信じられなかった…。でも今の君の姿を見て有り得ることなんだって分かった…」

そう言っただけ彼は一度俯く。そして再び彼が顔を上げたとき、彼はゆっくりと一言一言をかみしめるように言った。

「彼は…山中 啓は君なんだ。」

私には彼の言葉が信じられなかった。

何かの間違いよ…。いいえ。そんなこと、あるわけないじゃない。

私は…ここにいるのに。

「彼は、君だよ。」

もう一度彼は私に真実を告げる。

認めたくなくてもそれは事実として私に襲いかかる。

「彼は…君から作られたんだ。成実…君はS山掃討作戦を覚えてるよね？」

私は頷く。

S山掃討作戦。それは私が初めて赴いた実戦だった。SCARがEの巣と化していたトンネルでフェニックスと共にEを掃除したのだ。

私もそこで安弘と再会した。

でもEは数が多すぎて…何人も仲間が死んでいった。

私も負傷したけど…。何とか生きて帰ってきた。

その事件以来私はRAIVENとして生きている。

「彼はね、君の流した血から生まれたんだ。君の流した血がEの流した血と混ざり合って…そのサンプルをフェニックスが回収したんだ。そして…」

少しの間の後彼はゆっくりと言った。

「クローンを作り始めたんだ。より精密な兵器になる人間を作る為に。その為に彼は生まれた。だけど彼は自分の生き方に、苛立ちを感じていたんだろうな。道具として使われる毎日に。…そしてその元となってしまった君や僕たちを恨んでるんだ…。」

私はどうして良いか分からなかった。

彼が…私？どうすればいいの？

私は分からなかった。私はその場に崩れ落ちた。

そして瞳からは涙がこぼれてくる。

そんな私の肩を彼が叩く。

「…辛いのは分かるよ。でも…君も僕もここで立ち止まってたらダメなんだ…。僕たちにはすることがあるじゃないか…。」

そう言っ
て彼もに
じみ出て
きた涙を
振り払っ
た。

私は夏蓮
に抱かれ
て嗚咽を
漏らし続
けていた。

32・岩倉 義一 / 佐藤 安弘

やっと、静まりかえった。

高橋さんはなんとか活力を取り戻したようで安心したが不安定なのは分かっている。

俺は岸田と共に藤川さんと高野さんに続く。

そして話し合った結果俺たちは生存者達の護送をすることとなった。高橋さんと安弘さん達は別にどこかへ行くようだった。

俺は生存者達の支度が出来る間ロビーでマガジンへの装填を行っていた。岸田もだ。

かなりの弾薬を消費した。だから素速くマガジンに装填していく。ふと顔を上げると高橋さん達がどこかへと出かけるところだった。

駐車場に止められた車に乗り込む。

成美も一緒だ。

成美が助手席に乗り込もうとすると一人の女性がかけてきた。確か…夏蓮とか言う名前だったはずだ。

「待つて。私も行かせて。」

成美は寂しげな顔で首を振る。

「これ以上危険な目に遭わせたくないよ…。」

そう彼が言つと今度は夏蓮が成美に抱きつく番だった。

「もう、離れたくないよ…。ねえ…。危険なのは分かっている…。分かってるの…。でも…離れたくないよ…。」

そう言つて泣きじゃくる彼女と成美に言つ。

「彼女だつて何も出来ない訳じゃないだろう？一緒に行くつ。」

そう言つて二人が乗り込むと車のエンジンをかける。

そしてかなりの高スピードで発車させた。

33・高橋 成美 / 岸田 健児

瞳を閉じて全神経の感覚を集中させ、奴の居場所を探る。
居場所は、私の頭に流れ込んでくる。
どこか、暗い場所……。

瞳を開けるとそこはまだ暗い街の中。
だが次第に夜は明けつつある。
急がなくては……。

「場所は？」

安弘の言葉に少しの間沈黙する。
確実とは言えない。畏かもしれない。

でも、私は自分を信じた。それに彼が私と同じなのなら……。

「旧第43研究所へ。」

彼に告げると彼は一瞬驚いたが直ぐに頷いてくれた。
そしてその後、彼は一気にアクセルを踏み込んで加速した。
終わりは近付いている。私はそう感じた。

その先にあるのが未来か、終焉か……そして最後に立っているのは私か、彼か……。
予想は付かぬまま時は刻一刻と迫っていた。

避難作業を終えた俺は岩倉と共にベンチに腰掛けていた。

「成実・・・大丈夫かな・・・。」

コーヒーを飲みながらふと呟いた。

俺たちはこんな事をしていて良いのだろうか？まだなにかすることはなかったのか？

「・・・何かしたいと思ったのならすればいい。彼らも待っているはずだ。」

そう言ったと思ったら次の瞬間には岩倉は立ち上がってSLEをコックする。

呆然とする俺に彼は告げる。

「まだ遅くはないだろう・・・。それともお前は全てを諦めたか？」

そう言って彼は立ち去ろうとする。

俺も岩倉の後を追って立ち上がり、SLEを抜いてSUVに乗り込んだ。

34・高橋 成美

車を止めるなり私は凄まじい威圧感に負け、鳥肌が立つと同時に全身の力が抜けてダッシュボードに突っ伏した。

憎悪。

彼の怒りと苦しみが私に襲いかかってくる。

しかし私とて負けるわけにはいかない。

自らの力で起きあがり、車の扉を開けるとSLEを抜いて施設の入り口の前に立つ。

「…20分経つても私が戻ってこなければ藤川に頼んでこの施設を爆撃しなさい。…そうするしかないわ…。」

そう言つて私は単身、その施設へと乗り込んだ。

数年前から時間が止まった施設。

その暗く詰めたい廊下を私はゆっくりと歩いていく。

奥へ進むほどに私に襲いかかる圧力は強くなってくる。

だが私は負けない。

「くっ。」

声を上げて片膝を冷たいコンクリートの床に着く。

手を額に当てて歯を食いしばる。

頭に流れ込んできた映像…。

製造されていく”ニンゲン”達。

胎児に注入される、E。

そして…彼。

私は目を開けると銃を持って走り出した。
居場所は完全に分かった。
一路その場所へと走った。

” 処理室 ”

その言葉の書かれたプレートを見つけ、その扉の前で一度立ち止まると銃を構えて中に入る。

処理室は実験サンプルを処分する為の強酸性の液体が流れる水路が設けられた部屋だった。

丁度部屋の中心、一段高くなった場所：金属製の階段を上った先に、それはあった。

…恐らくまだ施設は生きてる…。

そう思うと同時に後ろに気配を感じる。

「消える。」

闇の中、ピンと張りつめた空気が動く。私は前方に向かってローリングで移動すると私のいた空間に向かって冷たい刃が振り下ろされた。

私はリーニングポジションでかつてやったようにダブルタップで彼を射撃する。

憎悪で崩れた顔。私を殺すことへの躊躇いは何もないようだった。

彼の身体に45ACP弾が突き刺さる。

彼は怯みもせずに私に9mm弾を撃ち込んでくる。

その直前にその場を離れた私は何とか弾丸の直撃は受けなかった物

の彼の直ぐ側まで移動せざるを得なかった。
彼が私の首を掴んで持ち上げる。

凄まじい力だ。

脳への酸素の供給が絶たれる。

マズイ…。

私は彼の頭を蹴り上げるとその頭めがけて45ACPを撃ち込んだ。
彼が叫び声を上げて私を地面に振り落とす。

彼は怒りに燃えて私に突っ込んでくる。

私は軽くそれを回避すると45ACPのカウンターを食らわせた。

だがその内に彼は私の動きを呼んだのか先回りをして攻撃を仕掛けてくるようになった。

私はそれを間一髪で避けるが次第に追いつめられていく。

彼は9mm弾を私の近くまで撃ち込んでくるようになった。
装弾数の面から言って2倍以上の装弾数を誇る彼のそれに敵うはずがない。

接近戦でも私はスピード面で勝てるが彼のパワーはそれ以上だった。

彼は接近して私の首を掴んでコンクリートの壁にたたきつける。

凄まじい衝撃に顔をしかめる。頭に何か生暖かい物が流れていた。

私起きあがるより先に彼はナイフを引き抜いて私を突き刺そうと飛びかかってきた。

間一髪で直撃は避けたが腕を切りつけられる。

「お前は俺に敵わない!!」

そう言って彼は私の胸ぐらを掴んで床にたたきつける。

くっ……。

そのスキに彼はナイフを振りかぶると私の腹へとそれを深々と突き刺した。

刹那。

痛みも既に感じていなかった。
ただ血が流れ、私の身体が引き裂かれるだけだ。

彼がナイフを引き抜いてもう一度私にとどめを刺そうと大きくナイフを振り上げる。
そしてナイフは振り下ろされた。

ドクン

鼓動と共に身体が熱くなる。
視界はその瞬間色彩が鮮やかに、そして私は…。

素速くダークネスを彼に向けて撃つ。
弾丸は彼の手のナイフに当たる。
その衝撃に彼の手からナイフが飛ぶ。

私は彼の腹を蹴り飛ばす。

彼の身体が壁に当たり、コンクリートの壁がひび割れる。

私は私自身の体の変化に驚愕した。

力が…なんだろう…？

その疑問の答えを出す前に彼が起きあがる。

彼も猛スピードで、今まで以上の速さで私に攻撃を仕掛けてきた。ナイフを拾った彼の勢いはますます強くなる。

私はダークネスを投げ捨てるとナイフを引き抜いて突進してくる彼の身体を切り刻んだ。

「分かってる。心臓も、頭も撃ち抜かれても死なないあなたの弱点は…」

そう言ってその場所にナイフを滑らせる。

「首！！」

首を滑ったナイフ。

そして私は彼の脇を走り抜け、そのまま壁を蹴って彼の背中側からもう一度襲撃する。

彼もナイフを背中側へと回す。

「勝負！！」

二人のナイフは激しく火花を散らした。

パワーでは彼の方が、上。

でも私はそれ以上！

ナイフが戻り終わる前に私はエターナルを抜いて彼の首めがけて8発、撃ち尽くした。

私が着地すると同時に彼は崩れ落ちた。

どす黒い血が流れ出る。

私は息を切らして朦朧とする意識を保とうとした。
一気に身体から力が抜ける。

私は彼を見る。

目が霞む…。

私は刺された腹部へと手をやる。
血が流れてる。かなり酷いが…。

その時空を切る音がした。

彼のナイフが…私の足首を切りつける。

そしてそれと同時に銃声…。

夏蓮が、奴の中枢神経にとどめを刺した。

彼は、完全に動かなくなつた。

私はもう身体を支えられず、その場に倒れた。

霞んだ意識の中私の目には涙を流して何か言う夏蓮の姿が写つた。

『…私…死ぬのかな…。分からない…。でも私…、幸せだった…。』

声に出したつもりだが本当にそれが夏蓮に伝わったかどうか…分か

らなかつた。

岩倉と共にその施設に飛び込むと、その場に居たのは泣きじゃくる夏蓮と彼女に抱かれている成美、そして奴の亡骸、その脇に立つ安弘だった。

あちこちに血痕や薬莢が転がっている。
激しい戦闘を物語る痕跡そのものだった。

何があつたのかは分からないがとにかく俺たちのような常人がついて行けるレベルの戦いではなかったとは容易に推測できる。

「大丈夫か？」

夏蓮に尋ねると彼女は首を振るばかり。

岩倉も暗い顔だ。

成美を中心に夏蓮の手にも血がベッタリと付いている。
助かるだろうか…。

舌打ちして奴の亡骸の側による。

「こいつが…」

俺が奴の身体を蹴ろうとすると奴の身体がぴくり、と動いたような気がした。

ハツとして後ずさりしようとする奴の背中が引き裂かれ、中から黒いトカゲのような生き物が姿を現した。

そいつは全身黒光りで…硬そうな身体…。

さながらゴキブリとトカゲを交配したらこんな感じになるのではないかと思った。

高周波の音を出して赤い目でこちらを見る。

素速くSLEを構えて後ずさりする。

だが奴はそれ以上に素速い動きで俺に飛びかかってきた。

奴は大口を開けて俺に噛みつきようとしてくる。

そんな奴の横顔を殴りつける。なんとか奴の口の軌道をずらすことに成功した。

だが奴の皮膚は予想以上に硬く、俺の拳が砕けた感覚がした。

「くっ！！」

安弘が激しく射撃するが奴の身体には効果が見られなかった。

岸田のピンチに俺は辺りを見回す。

何か…。

そっだ。

あることに気付く。

ここは処理室だ。どんなサンプルでも処分できる環境が整っている…。

「岸田！！何とかして処理水路に行け！！」

そう叫んで俺は制御室へと向かった。

狭い通路を走る。

ここからでは彼らの様子が見えない…。
なんとか無事でいてくれ…。

そう思ったのも束の間、羽音がしたかと思うと10体ほどのカラスの大群が襲いかかってきた。

「畜生！！」

SLEを抜いて奴らを切り刻み、発砲する。

そして制御室の扉へ向かう。

羽音が迫ってくる。

既にあちこち血だらけだ。

制御室のドアノブを掴むと素速く身体を中にねじ込んで、ドアを閉めた。

制御室から処理室の様子が見えた。

岸田が処理液のたまった水路の足場を走っている。

俺はシャッターのスイッチを探す。

それを見つけると岸田に向かって叫んだ。

「水路を飛び越えろ！！」

36・高橋 成美 / 岸田 健児

うつすらと目が開く。

あ・・・生きてる…。

そう思うと同時に夏蓮と目が合う。

彼女が微笑みかけてくる。

私も微笑みかえして・・・その場の状況が頭に流れ込んでくる。

行かなきゃ！！

私の心臓が再び大きく鼓動を始め、私の身体を電流のような衝撃が駆けめぐる。

岸田が水路を飛び越える。

それを追ってEも飛ぶ。

だが岸田はEよりもジャンプが届きそうにない。

彼も強酸性の液体に落ちてしまう！

私は猛スピードで階段を駆け上り、水路の端に立つ。

そして手を伸ばして岸田の手を掴んで引っ張る。

彼が私に向かって倒れ込んでくると同時にシャッターが終わりへの

音を立てて閉まる。

シャッターの落ちた音共にEがシャッターへと当たり、はじき返され…液の中へと落ちる。

断末魔の叫び声を上げ…復讐の女神の魂は消えていった…。

「「「やった!!!」「」」

皆の歓声に俺も成美もホツとして力が抜ける。

もう、完全に力が抜けてしまった。

そんな俺に夏蓮は冷ややかに言う。

「…岸田…早くこつちへ来た方が良いわよ？」

そう言われて一瞬間を置いて俺は自分の置かれている状況に気付いた。

「…いくら昔は男だったとはいえレディーの上に乗って胸に顔を埋めてるなんて…押し倒しているようにしか見えないわよ？」

皆の苦笑と共に俺は真っ赤になった。

エピソード

私は夏蓮に支えられて外へと出てきた。
もう、朝日が上り始めていた。

「綺麗…。」

私はポツリと呟いた。
やっと、終わった。全てが…。

人生は長い。

だがその結末は一瞬で終わってしまうものだったのだ。
だから人々は今を生きる。

今だけでもいいから。

理由なんて何だっていい。

でも憎しみに捕らわれて生きることにも何も意味はない。

憎悪にまみれて、くすんだ人生を生きたって、すべてが終わったと
しても何も変わらない。

だから、どんな理由でも明るく生きようとするべきだ。

私達の輝く未来は私達自身で作り上げるのだから。

例え悲しくても、生きる。

私は車に乗せられて瞳をゆっくりと閉じる。

すべてが終わった私の心は複雑だった。
でも私の戦いの答えは一つ。

今の私。

男から女へ。

それがこの戦いの最後に残った物。
変化。

その結末は良くもなければ悪くもない。

どちらになるかは私自身が決めることだ。

長い夜が明け、私達にも平凡な生活が戻ること信じて全は深く息を吐いて呟いた。

「…ありがとう。」

エピソード（後書き）

はい、ここまで読んでいただけの方、ありがとうございます。

繰り返し言い訳になりますが、中学生のときに書いたので文法とかもう何もかもめちゃくちゃです。

ただシナリオだけ見て下さい、と言ってみる。

シナリオ自体の評判はいいのでリメイク予定です。

が、やるが多すぎて時間がないというのが悩みの種……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1344y/>

E

2011年11月1日23時12分発行